茨城県笠間市小原

小原遺跡発掘調査
報告書

平成19年1月

笠間市小原遺跡発掘調査会

茨城県笠間市小原

小原（おばら）遺跡発掘調査

報告書

平成１９年１月

笠間市小原遺跡発掘調査会

序

笠間市小原は、旧友部町市街地の北東部に位置し、友部丘陵から流れる涸沼前川に拓かれた水田地帯の左岸台地上にあります。この台地に畑作地帯総合整備事業が進められています。この事業は、近年来の日本産業の改変の波を受けて農林業においては、耕作放棄に追い込まれた桑畑や栗畑と荒れ果てた平地林がこの地区にも多く見られるようになりました。この状況は、産業基盤の崩壊につながるとの危機感から、国の重要施策の一つとして取り上げられた事業でもありました。これは畑地の再生を図りながら、生産性の向上と効率的な畑作地帯を作り出す農業基盤の整備なのです。

そこで旧友部町は、重点施策の一つとして取り上げ、小原地区に土地改良組合を設立させ、国や県の援助と指導のもとに実施してきました。範囲は、ＪＲ常磐線を挟んで字筒塙を南区、北区は字小原地内で、今、畑地の区画整理、農道、かんがい施設等の生産環境が整いつつあります。

教育委員会は、この事業の計画段階から南区には二本松遺跡、北区には町指定史跡の一本松古墳群と小原遺跡が所在することから、埋蔵文化財の保護上の調整をしてきました。特に今回の調査で、調査主任の能島清光氏には、平成14年度から現在に至るまで数回にわたり、つぶさな分布調査と試掘による確認調査を依頼し、埋蔵文化財保護上の資料をもとに、南区では切土地内、北区では幹線道路２ヶ所を大成エンジニア株式会社によって記録保存の処置をとってきました。

今回の調査は、北区の生産環境の整いつつある地内を横断する市道１級５号線の改良工事に伴うものです。区画整理地内での現道は狭隘な上に曲折が多く、畑作地帯総合事業の一環としての整備で、拡幅や直線状の新設も含まれ、更にその延長は、旧内原町の三湯から内原駅前の開発計画を結ぶ重要路線に位置付けられていること等から、部分的ではありますが、本年度内に工事完成が予定されています。その緊急性と６００㎡の面積でもあることから、平成17年３月に確認調査を依頼した能島清光氏に引き続き遺構確認地点を中心に調査を依頼したものです。

調査の結果は、古墳時代から奈良・平安時代の７軒の住居跡が検出され、完形や復元できる土師器や石製帯金具、円面硯等の貴重な遺物が多く出土し、小原地内の古代の有様の一端が明らかになったことは意義深いものがあります。先の幹線道路の発掘調査結果と合わせて、原始・古代の解明の一助となることを期待するものであります。

最後に、調査にあたられました関係者の方々や御協力をいただきました道路建設課、小原土地改良組合及び御指導をいただきました萩原指導員と県教育庁文化課に衷心より感謝申し上げ序文といたします。

平成19年１月

小原遺跡発掘調査会長
笠間市教育委員会教育長
飯　島　　勇

例　　言

1　本書は、平成１８年１０月に実施した道路改良（市道(友)１級５号線）に伴う記録保存のための小原（おばら）遺発掘調査報告書である。

2　調査のため、笠間市教育委員会は、小原遺跡発掘調査会を設けて実施した。

3　発掘調査会の組織は下記のとおりである。

会　長	飯　島　　勇	（笠間市教育委員会教育長）
副会長	寺　内　　寛	（笠間市文化財保護審議会副会長）
〃	岡　井　俊　博	（笠間市教育委員会生涯学習課長）
理　事	深　谷　　忠	（笠間市文化財保護審議会委員）
〃	幾　浦　忠　男	（笠間市文化財保護審議会委員）
〃	檜　山　成　勇	（笠間市文化財保護審議会委員）
〃	南　　秀　利	（笠間市文化財保護審議会委員）
〃	能　島　清　光	（笠間市文化財保護審議会委員）（調査主任）
監　事	河原井　規　夫	（笠間市教育委員会生涯学習課国民文化祭推進室長）
幹　事	海老原　和　彦	（笠間市教育委員会生涯学習課文化振興グループ係長）
〃	海老澤　　仁	（笠間市教育委員会生涯学習課文化振興グループ主幹）
〃	川　松　祐　市	（笠間市教育委員会生涯学習課文化振興グループ主事）

4　調査団は下記のとおりである。

調査主任	能　島　清　光	（笠間市文化財保護審議会委員、笠間市史研究員）
調　査　員	山　口　憲　一	（県教育庁文化課　嘱託）
調査補助員	横井義夫、正木信行、渡辺幸友、大図孝一、白沢忠夫、塩畑勝利 高橋きみ江、田辺伸子、菊池芳子	

5　調査にあたり、次の方々、諸機関から御指導と御協力を賜った。記して感謝の意を表したい。

県教育庁文化課、鯉渕和彦、萩原義照、市立歴史民俗資料館、市立友部公民館

6　本書の編集・作成は、住居跡や遺構・遺物の観察及び考察は、山口調査員が、土器の復元、実測、作図は、高橋きみ江、田辺伸子、菊池芳子が行い、その他は、能島清光が担当した。

7　調査にあたり、発掘調査区域外の地主枝川永男、高橋三吉氏に、整理作業では、市立歴史民俗資料館藤井協、茅原松幸氏に特段の御協力をいただいた。ここに記して感謝の意を表したい。

凡　　例

1　遺構・土層・遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。

遺構　　住居跡－ＳＩ　　土坑－SK　　ピット（柱穴）－Ｐ

遺物　　土器－Ｐ　　土製品－ＤＰ　　石製品－Ｑ　　鉄製品－Ｍ

土層　　撹乱－Ｋ

2　土層観察と遺物における色調の判定は、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著　日本色研事業株式会社）を使用した。

3　遺構・遺物実測図の掲載方法については、次のとおりである。

（１）遺構全体図は４００分の１、各遺構の実測図は60分の１に縮尺して掲載した。

（２）遺物の実測図は３分の１の縮尺で掲載した。

（３）遺構・遺物実測図中の表示は次のとおりである。

竈材・粘土　　焼土　　黒色処理

●　土器　　○　土製品　　□　石製品　　△　鉄製品　　硬化面

4　遺物観察表の作成方法については、次のとおりである。

（１）　計測値の（　）内の数値は既存値を、〔　〕内の数値は推定値を示した。法量についてはcm、重量についてはｇで示した。

5　「主軸」は竈を持つ竪穴住居跡については竈を通る軸線とし、他の遺構については長軸（径）を主軸とみなした。「主軸・長軸方向」は主軸が座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した。

目　　次

序
例　言
凡　例
第１章　　調査の概要
　第１節　　調査に至る経緯
　第２節　　遺跡の位置と環境
　第３節　　調査の経過

第２章　　調査の成果
　第１節　　遺跡の概要
　第２節　　遺構と遺物
　（１）　竪穴住居跡
　　第１号住居跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　９
　　第２号住居跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１３
　　第３号住居跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１５
　　第４号住居跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１７
　　第５号住居跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１９
　　第６号住居跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２３
　　第７号住居跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２５
　（２）土坑・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２９
　（３）柱穴跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３８

第３章　　総　括

第１章　調査の概要

第１節　調査に至る経緯

新笠間市の中央に位置する旧友部町は、ＪＲ常磐線特急と水戸線発着の友部駅があり、陸路では、常磐高速道と連結する北関道のインター、更にいくつもの国道・主要地方道が縦横に走る交通要衝の地である。そこで友部駅から南部の平坦地は、市街地で地方都市の形態を呈し、人口も集中している。これに比べ北部の丘陵地は、山林や農耕地帯の中に集落が点在し、今後の発展が期待されている。

そこで旧友部町は、この北部の振興が都市基盤の形成上重要であると考え、都市計画道の整備に努めてきた。その一つが鉄道をまたぐ高架橋をもつ「宿・大沢線」で、今後は友部インターと結び、西部地区の振興にも寄与する重要な道路として位置づけされてきている。

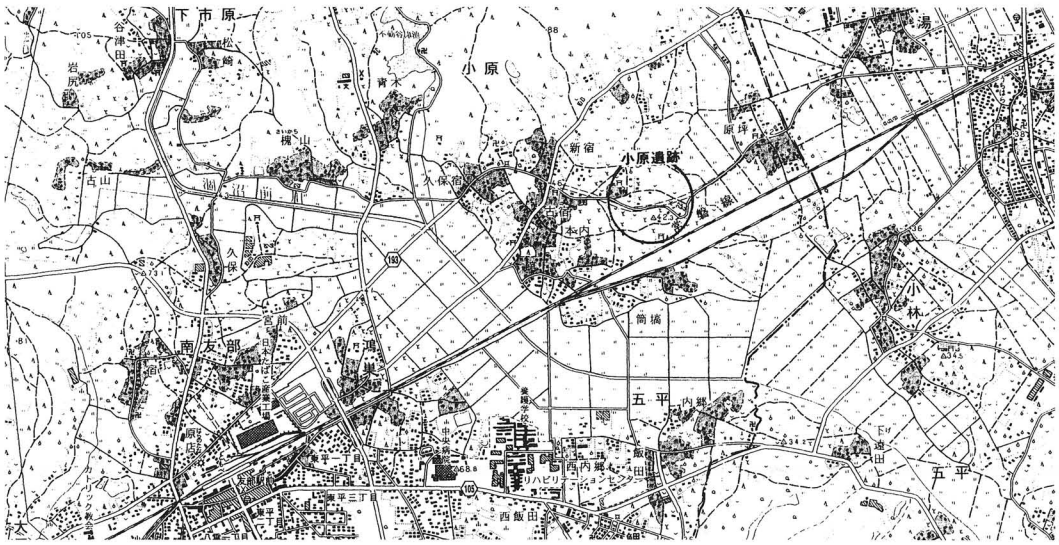
更に、ＪＲ友部駅の高架駅建設に伴い、駅の北口の開設が進められ、ここを結ぶ県道杉崎・友部線と市道（友）１級５号線もあわせて重要な路線となっている。この現道は小原地内字久保宿あたりから狭隘で曲折が多く、特に畑地帯総合整備事業北区を横断することから、土地改良組合からも道路の拡幅と直線道としての改良工事が望まれている。

特に市道（友）１級５号線は、ほぼ区画整理が完了した中にあり、更に旧内原町の字三湯と内原駅北口の駅前開発に連動する道路として早急な整備が望まれていた。そこで旧友部町の道路建設課は、路線計画にあたり平成16年７月26日付で路線内の埋蔵文化財の有無及びその取扱いについて教育委員会に照会した。

教育委員会は、小原地内には小原遺跡をはじめ一本松古墳群があることと、平成14年度以来、畑地帯総合整備事業地内は、確認調査によって幹線道は発掘調査されていることから、路線内も試掘による確認調査が必要であることを同年８月４日付で回答した。

その後、地権者や土地改良組合の試掘同意が得られたことから、教育委員会は、平成17年３月に調査区を設定して確認調査を実施した。その結果、直線道の新設地Ａ区に遺跡所在が確認されたことから、文化財保護上、約600㎡は記録保存の発掘調査が必要である旨を同年３月23日付で道路建設課へ報告した。

その後、土地改良組合によって用地取得ができたことから道路建設課は、平成18年７月21日付で文化財保護法第94条の規定に従って、土木工事による発掘届を提出し、従って教育委員会は、同法第92条の１の発掘届を県教育委員会へ提出した。県教育委員会からは、同年８月25日付で発掘調査実施への指示があったことを受けて、市教育委員会内に同年９月28日「小原遺跡発掘調査会」を設立し、確認調査を依頼した能島清光氏（笠間市文化財保護審議委員）を調査主任に委嘱して10月８日より調査に入った。



第２節　遺跡の位置と環境

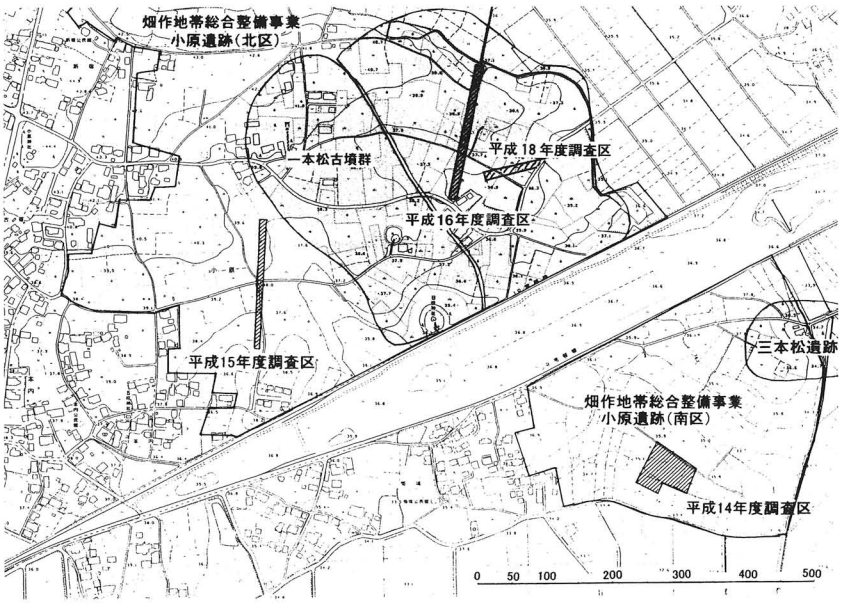
旧友部町の北西山間地帯から流れる数条の小河川が東部平坦地に向かって流れ、下流に至って合流して涸沼前川となり、旧内原町からやがて涸沼川へ注ぐ。

この涸沼前川流域は、沖積低地で豊かな水田地帯となっている。ここに突き出た丘陵先端部の地形に遺跡が多く点在している。ＪＲ常磐線が斜めに走る上り線南側の字筒塙地区に三本松遺跡があり、北側は広範な字小原地区で集落の東のＪＲ下り線に接して山王塚古墳など市内最大の古墳を有する一本松古墳群（市指定史跡）と広々と開けた農地が小原遺跡である。ただ、この２ヶ所の面的な遺跡の範囲は明確さを欠いていたが、畑地帯総合整備事業が計画されたことから、つぶさな分布調査と試掘による確認調査によってこの台地一帯が重要な遺跡の包蔵地であることが判明した。

この畑地帯総合整備事業は、ＪＲ常磐線を境にして南北に分かれ、三本松遺跡のある南地区のうち、平坦な農地造成のため掘削地となった3,400㎡が平成14年度に記録保存の発掘調査によって弥生時代の住居跡15軒、古墳時代の住居跡14軒、奈良・平安時代の住居跡64軒、その後の中世以降の諸遺構が検出され、長きに亘って変遷を経ながら大規模な集落が営まれてきたことが明らかとなり、「いばらき」の名の由来の地であるとともに、旧茨城国の中心的地域であったと想定できる。

また北地区は、掘削工事をする幹線道路建設用地が発掘調査の対象地となり、平成15年度に遺跡の南西部にあたる幹線道２号建設用地1,260㎡が調査され、縄文時代の土坑５基、弥生時代（後期）、古墳時代（前期）の住居跡が１基づつ、近世の土坑、溝４条が検出された。さらに、平成16年度には、遺跡の北東部にあたる幹線道１号建設にかかる1,080㎡が調査され、弥生時代の住居跡２軒、溝状遺構１条、古墳時代（後期）から奈良・平安時代の遺構は、竪穴住居跡４軒、掘立柱建物跡３棟が検出された。これらの調査から、小原遺跡は主に弥生時代後期から古墳時代以降の集落跡の広がりが予想される。しかし、400ｍほど離れた双方の間で、平成15年度調査区には、古墳時代後期から奈良・平安時代の遺構は全く検出されず、一方、平成16年度調査区では、弥生時代と古墳時代後期及び奈良・平安時代の集落跡である。このことは、特に古墳時代から奈良・平安時代にかけては南側の小支谷を介して、双方の台地の集落跡に時代差が認められると考えられる。

いずれも調査は道路敷と限定され、一概に断定は出来ないが、この小原遺跡の中央部に点在する一本松古墳群と２つの集落跡との関係が、平成16年度調査区に隣接する今回の調査によって幾分でも明らかにされることが期待されることになったのである。



調査地点位置図

第３節　調査の経過

10月４日（水）晴

・設営作業

　生涯学習課と共に作業

　海老原係長　川松主事

発掘前の状況

10月８日（日）晴

・表土除去開始

・道路ポイント 40 ～ 41 の確認調査・・・ＳＩ－７

　の検出（前日台風 16 号豪雨のため湧水が多い）

・表土置場の確保のため隣地所有者との協議

10月９日（月）晴

・遺構確認

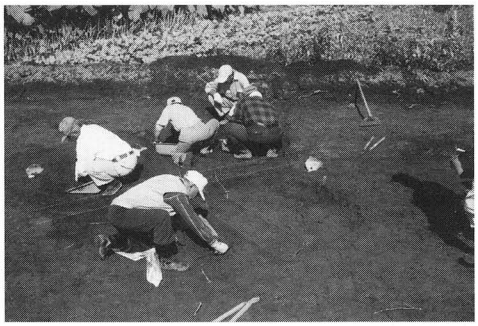
　ほぼ遺構が確認される。（ＳＩ・・・６軒、土坑

　１４基、その他ピット数箇所）

・残土置場として隣地を借用する。

・鯉渕氏の指導

　来訪者　桧山理事　道路建設課横手係長



10月10日（火）晴

・ＳＩ－１の発掘開始
土師器出土、カマドが検出される。
・萩原指導員　現地確認と指導
来訪者　生涯学習課岡井課長ほか４名

10月11日（水）晴

・ＳＩ－２の発掘開始
ほぼ完掘・・・出土遺物は少ない。
・ＳＩ－５、ＳＩ－３の発掘開始
重複するので慎重な調査となる。
来訪者　岡井課長　海老澤主幹

10月12日（木）晴

・ＳＩ－５、ＳＩ－３の調査継続・・・湿気が多く床面の検出に苦労する。
・ＳＩ－５のカマドを検出、住居跡東南部にもう一基のカマドを検出する。
・土坑（ＳＫ－１～１４）１/２発掘
来訪者　海老原係長　海老澤主幹
　　桧山理事

10月13日（金）晴

・ＳＩ－５ほぼ完掘
住居の下に小型住居跡があることが確認される。（ＳＩ－６）とする。
・ＳＩ－３完掘
出土遺物は少ない。カマド跡が確認される。
・ＳＩ－４発掘開始
来訪者　海老澤主幹・・・補正予算について検討する。

10月14日（土）晴

・ＳＩ－４ほぼ完掘

・ＳＫ－１～４・ＳＫ－６～14まで1／２発掘完了。
　ＳＫ－14は時期が近世以降のため破棄。

・ＳＩ－７　湧水及び流れ込みを除去。土のうを積んで調査に入る。
　来訪者　地元民４名

10月15日（日）晴

・ＳＩ－１　土師器完形の甑・坏が出土する。

・ＳＩ－７　発掘開始

・ＳＩ－７　ベルトセクション実測

・鯉渕氏の指導
　来訪者　いちごの会１２名

10月16日（月）晴

・ＳＩ－２～５、ベルトセクション実測。

・ＳＩ－１完掘

・柱穴精査

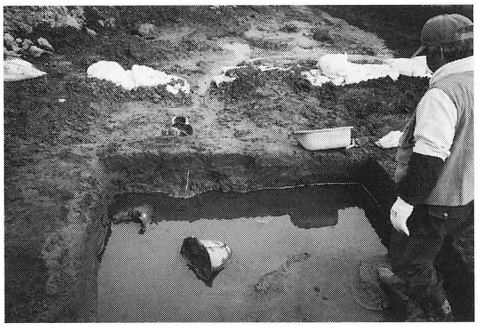
・掘立柱建物と予想される柱穴があったが、測定後単なるピットと判断された。
　来訪者　生涯学習課３名及び萩原指導員

10月17日（火）晴

・ＳＫ－１～４・６～13実測完了

・ＳＫ—５　発掘及び実測

・ＳＩ－７　ベルト除去後土師器出土
　来訪者　寺内、幾浦理事　海老原係長　地元民



10月18日（水）晴

・各遺構の清掃と実測及び写真撮影

・笠間市立歴史民俗資料館へ土器、用具等を搬出する。

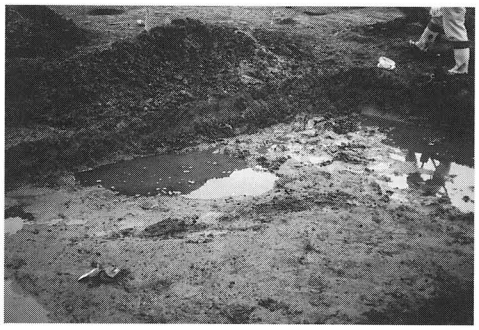
来訪者　海老原係長

10月19日（木）晴

・出土遺物の洗浄

・発掘用具の清掃と収納

・道路ポイント３７～３６の確認調査・・・遺構のないことを確認する。（海老澤主幹と共に実施）



10月21日（土）晴

・ＳＩ－７　木炭出土する。残存するカマドより土師器２点出土。

・各住居跡のカマド四分割及び完掘して実測と写真撮影。

10月22日（日）晴

・各住居跡のカマド分割と実測及び写真撮影。

・鯉渕氏の指導

10月25日（水）曇

・県文化課　横倉文化財保護主事の現地指導。
　調査完了が承認される。

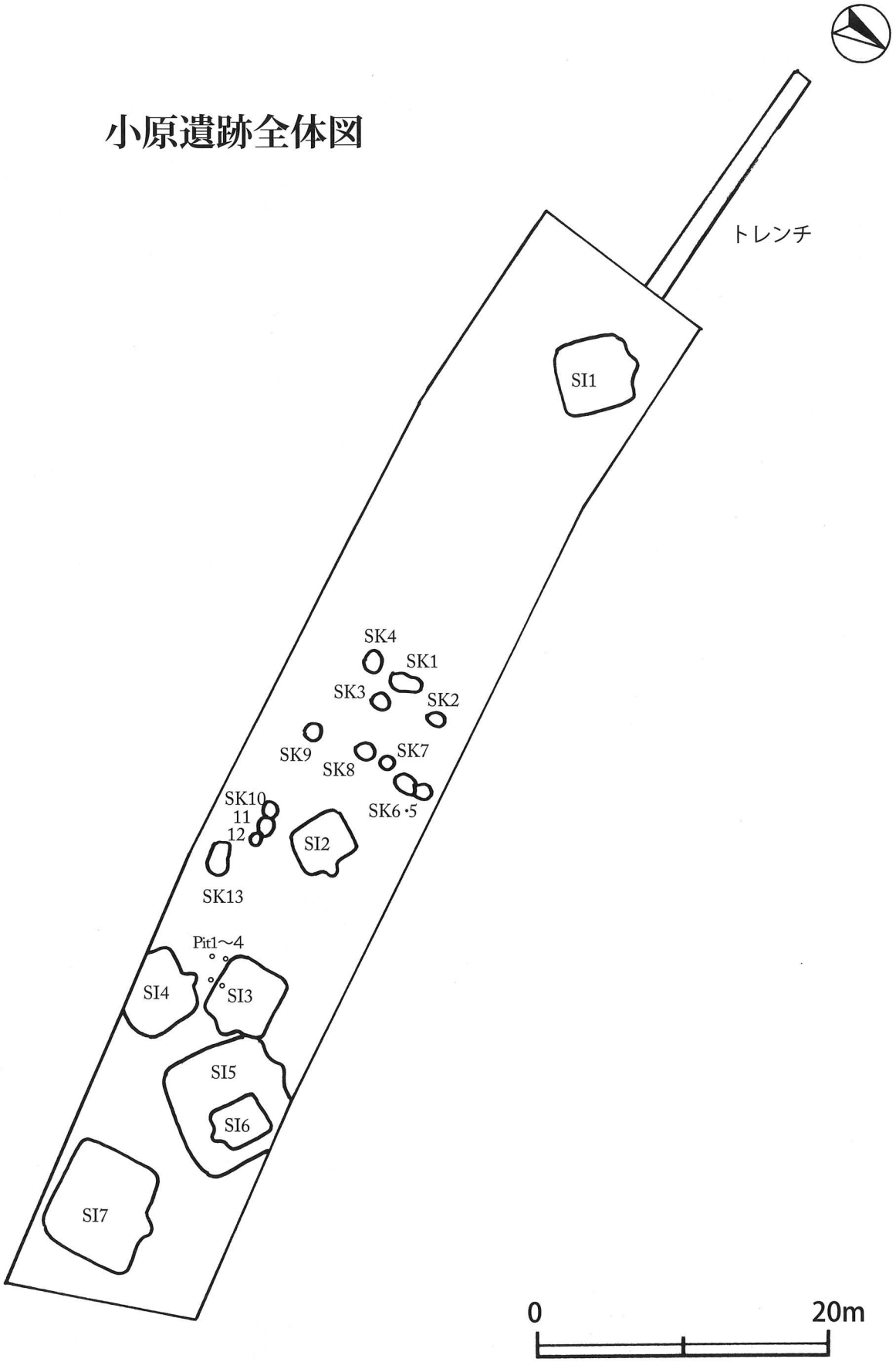
10月28日（土）晴

・調査区全体測量
・各遺構のエレベーション測量
・テント撤去と用具清掃、収納
　来訪者　生涯学習課　海老原係長　川松主事

10月29日（日）小雨

・住居跡のエレベーション測量
・補足実測
・出土遺物の洗浄
・遺物発見届の写真撮影
・用具洗浄と収納

整理作業風景


小原遺跡全体図
トレンチ
SI1
SK4
SK1
SK3
SK2
SK9
SK8
SK7
SK6・5
SK10
11
12
SI2
SK13
Pit1～4
SI4
SI3
SI5
SI6
SI7
0
20m

第１図　全体図

第２章　調査の成果

第１節　遺跡の概要

小原遺跡は、今回の調査によって、古墳時代後期から奈良・平安時代にかけての遺跡であることが判明した。遺構としては、竪穴住居跡７軒（古墳時代４、奈良・平安時代３）、土坑13基、柱穴４基が確認された。主な出土遺物としては、土師器（坏，甕，甑）、須恵器（坏，甕，蓋，円面硯）、鉄製品（紡錘車）、石製品（帯金具）、土製品（支脚）などである。

第２節　遺構と遺物

（１）竪穴住居跡

第１号住居跡（第２～４図）

位置　調査区の最西端に位置する。

規模と形状　東西4.10ｍ、南北3.40ｍの隅丸方形である。主軸方向はＮ－60°－Ｗである。

壁　ほぼ直立して立ち上がっている。壁高は25～30cmである。

床　ほぼ平坦で、出入り口付近から竈にかけての中央部分が踏み固められている。壁溝は全周している。

ピット　４ヶ所。P1～P3は径20～24cm、深さ35cm以上である。深さ35cmからは湧水のため掘りきれなかった。いずれも主柱穴と考えられる。P4は径20cm、深さ26cmであり、南壁際中央部に位置し、竈に対峙することから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

竈　北壁際中央に付設されている。規模は、焚口から煙道まで約110cm、袖部幅約124cmで、壁外へ15cmほど掘り込んでいる。袖部は甕片を芯材にし、砂質粘土で構築されている。火床面は床面を６cmほど皿状に掘り込んでいる。被熱を受けて赤変硬化している。竈中央部に土製支脚が据えられ、その上に被熱痕がない高坏が逆位の状態で被せてあることから、住居廃絶時のものと考えられる。煙道は、火床面から外傾して緩やかに立ち上がっている。

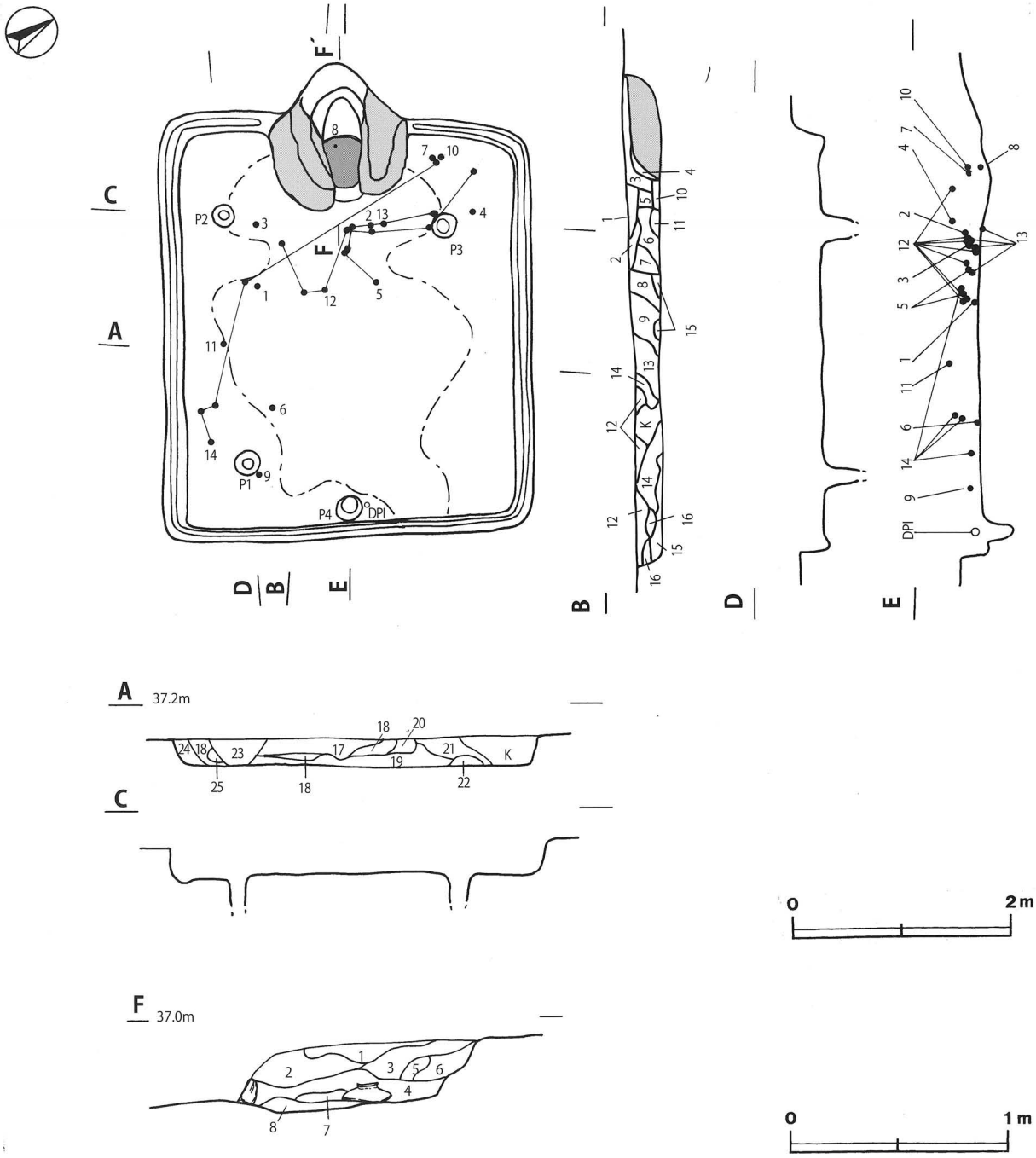
SI-１竈土層解説

1	暗褐色	ローム粒子・ローム小ブロック・粘土粒子中量、炭化粒子少量、焼土粒子微量、粘性なし、しまりあり
2	暗オリーブ褐色	ローム粒子少量・ローム小ブロック微量、炭化粒子中量、粘土粒子多量・粘土ブロック少量、粘性なし、しまり弱い
3	暗灰黄色	ローム粒子中量・ローム大ブロック少量、炭化粒子少量、焼土ブロック微量、粘土粒子中量、粘性なし、しまりあり
4	暗褐色	ローム粒子・ローム中ブロック少量、炭化粒子・焼土ブロック中量、雲母粒子微量、粘性なし、しまりなし
5	明黄色	焼土ブロック少量、粘土粒子中量、砂粒多量、粘性なし、しまりあり
6	暗オリーブ褐色	ローム粒子中量、炭化粒子少量、焼土粒子多量、粘土粒子少量、雲母粒子微量、粘性なし、しまりなし
7	極暗赤褐色	ローム粒子少量、炭化粒子・焼土粒子・焼土ブロック中量、粘性なし、しまりあり
8	極暗赤褐色	ローム粒子中量、炭化粒子微量、焼土粒子多量、粘土粒子少量、粘性なし、しまりなし

覆土　25層からなる。全体的に暗褐色土で、ロームブロックや砂粒、炭化粒子を含む。不規則な堆積状況から人為堆積と考えられる。

SI-1 土層解説

1 暗褐色　ローム粒子中量、炭化粒子・粘土粒子微量、粘性なし、しまり弱い
2 暗褐色　ローム粒子・砂粒少量、粘土粒子、粘性なし、しまり弱い
3 褐灰色　ローム粒子・ローム小ブロック・粘土粒子・砂粒中量、炭化粒子微量、粘性なし、しまりあり
4 褐灰色　ローム小ブロック・砂粒微量、炭化粒子・粘土粒子少量、粘性なし、しまり弱い
5 暗褐色　ローム小ブロック・砂粒・粘土粒子・炭化粒子微量、粘性なし、しまり弱い
6 暗褐色　ローム小ブロック・炭化粒子少量、粘土粒子微量、粘性なし、しまり弱い
7 暗褐色　ローム小ブロック多量、粘性なし、しまり弱い
8 暗褐色　ローム粒子中量、ローム大ブロック少量、粘性なし、しまり弱い
9 暗褐色　ローム小ブロック中量、ローム大ブロック少量、粘性なし、しまり弱い
10 暗褐色　ローム粒子中量、粘性なし、しまり普通
11 褐灰色　ローム粒子少量、ローム中ブロック微量、粘性なし、しまり弱い
12 暗褐色　ローム粒子中量、炭化粒子・焼土粒子微量、粘性なし、しまりあり

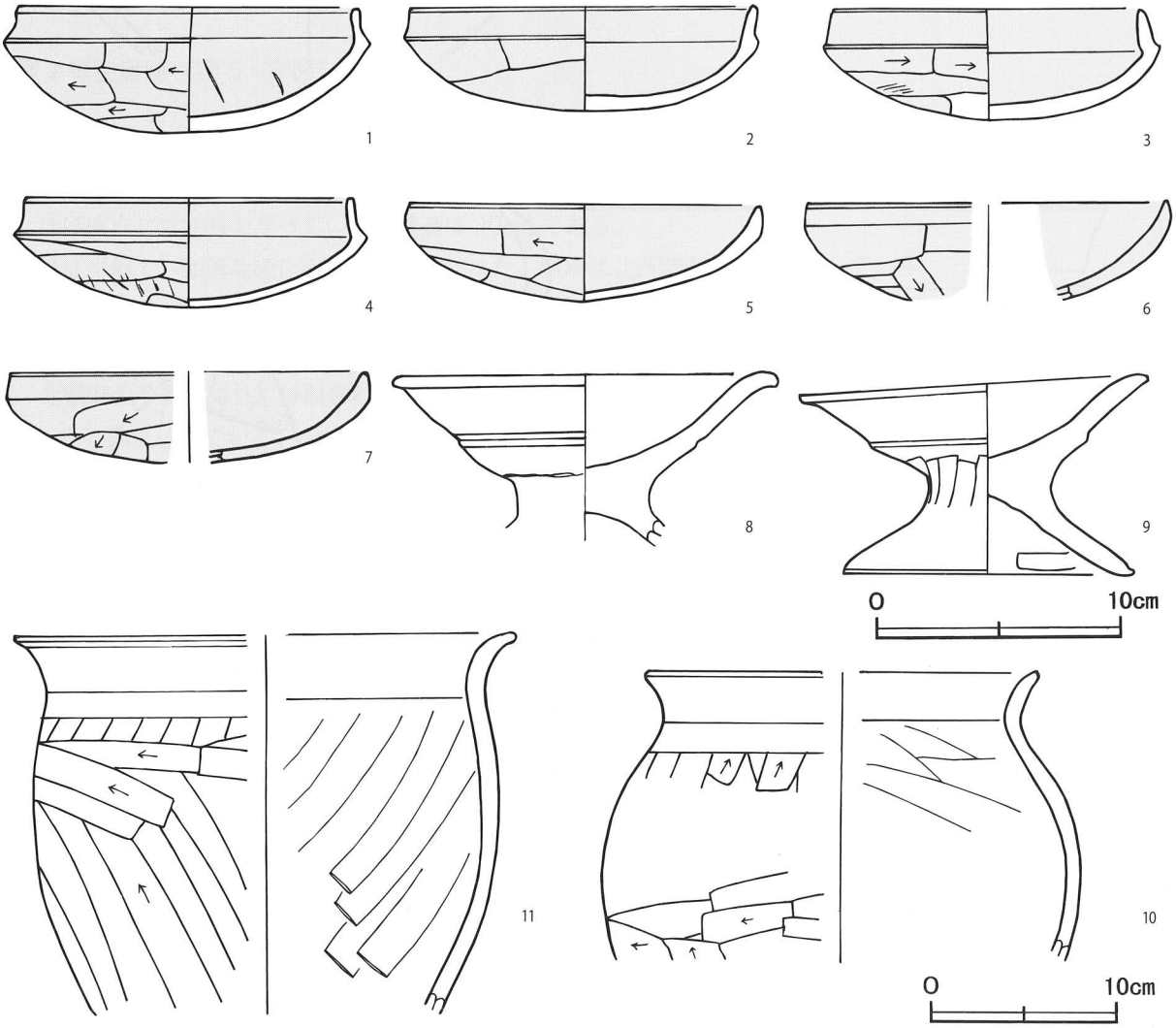


第 2 図 第 1 号住居跡実測図

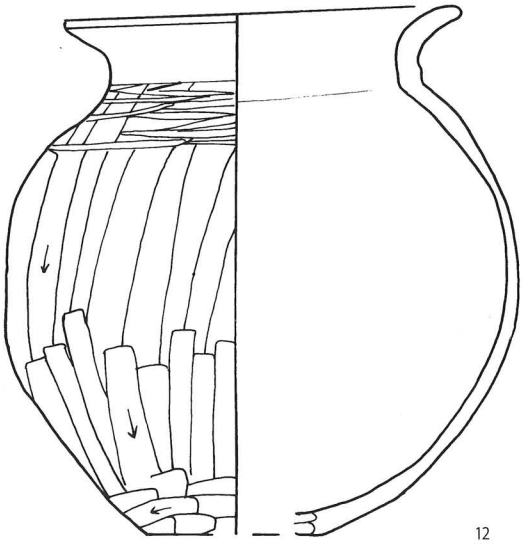
13 暗褐色　ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、焼土粒子微量、粘性なし、しまり弱い
14 暗褐色　ローム粒子・炭化粒子中量、粘性なし、しまり弱い
15 褐色　ローム小ブロック中量、粘性なし、しまり強い
16 暗褐色　ローム粒子少量、炭化粒子微量、粘性なし、しまり弱い
17 暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック中量、粘性あり、しまり弱い
18 暗褐色　ローム粒子中量、炭化粒子少量、粘性なし、しまり弱い
19 暗褐色　ローム粒子中量、ローム小ブロック微量、炭化粒子少量、粘性なし、しまりあり
20 褐色　ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、砂粒微量、粘性なし、しまりなし
21 黒褐色　ローム粒子・ローム小ブロック・砂粒少量、炭化粒子微量、粘性なし、しまりあり
22 暗褐色　ローム粒子中量、炭化粒子少量、砂粒微量、粘性なし、しまり弱い
23 暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック中量、炭化粒子少量、焼土粒子微量、粘性なし、しまり弱い
24 暗褐色　ローム粒子中量・ローム小ブロック少量、炭化粒子微量、粘性なし、しまり弱い
25 暗褐色　ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、焼土粒子微量、粘性なし、しまりあり

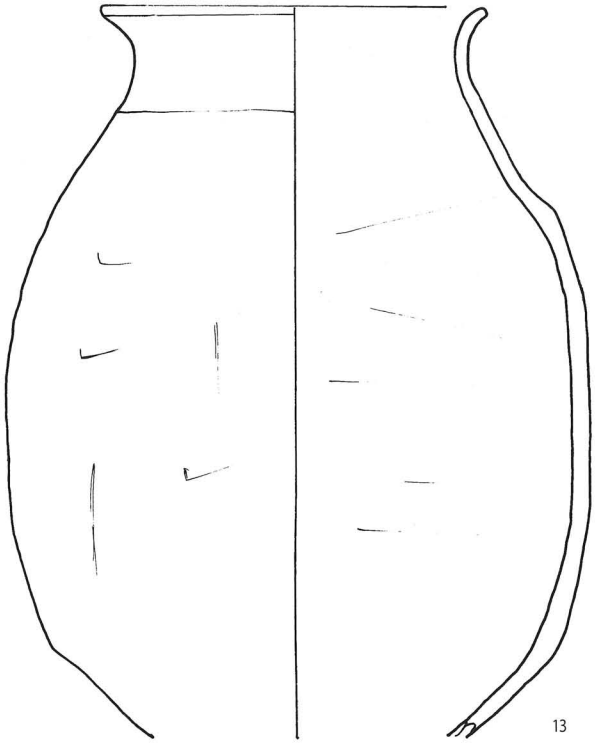
遺物出土状況　土師器片 225 点（坏 64，高坏 8，甕 140，甑 12）、弥生土器片 35 点，土製品 1 点（支脚）が出土している。弥生土器片は人為堆積時の混入もしくは流れ込みによるものと考えられる。土器片は北東コーナー部から竈手前にかけて集中してみられた。1～5 は竈手前の覆土上層から床面にかけて出土している。6 は南西壁際床面から出土している。7・8・10 は竈内の覆土中層から下層にかけて出土している。ほぼ完形品に近い土師器の坏や甕の破片が一個体にまとまった状態で出土していることから住居廃絶時に投棄された可能性がある。

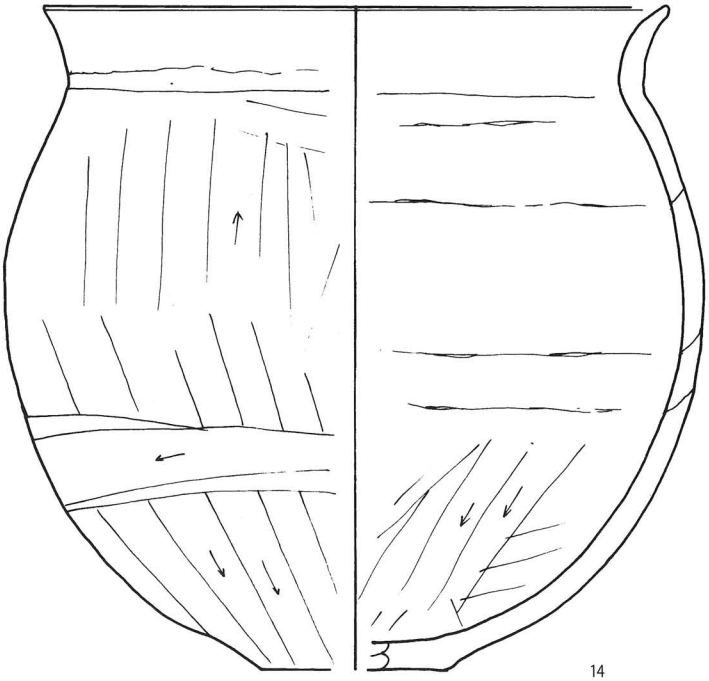
所見　時期は、出土した土器から 6 世紀後葉～末期と考えられる。

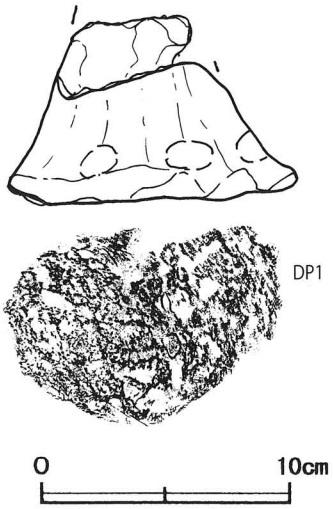


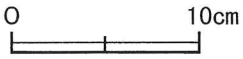
第 3 図 第 1 号住居跡出土遺物実測図(1)











第４図 第１号住居跡出土遺物実測図(2)

第1表　第1号住居跡出土遺物観察表

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	坏	14.0	5.3	－	砂粒・長石・石英	灰オリーブ	普通	体部外面ヘラ削り，内面ヘラあて痕	竈付近床面	100%
2	土師器	坏	14.2	4.3	－	砂粒・長石・石英	橙	普通	体部外面ヘラ削り，口縁部横ナデ	竈付近下層	90%
3	土師器	坏	12.6	4.6	－	砂粒・長石・石英	明赤褐	普通	体部外面ヘラ削り，口縁部横ナデ	竈付近中層	70%
4	土師器	坏	13.3	4.5	－	砂粒・長石・石英	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り，口縁部横ナデ	竈付近上層	80%
5	土師器	坏	14.4	4.0	－	砂粒	橙	普通	体部外面ヘラ削り	竈付近下層	45%
6	土師器	坏	〔14.6〕	(4.0)	－	砂粒	灰黄褐	普通	体部外面ヘラ削り，口縁部横ナデ	南西壁側床面	40%
7	土師器	坏	〔14.4〕	(3.7)	－	砂粒	にぶい黄橙	普通	体部外面ヘラ削り，口縁部横ナデ	竈中央中層	50%
8	土師器	高坏	15.4	(7.1)	－	砂粒・赤色粒子	橙	普通	口縁部横ナデ	覆土中	60%
9	土師器	高坏	14.0	8.3	11.8	石英・長石	橙	普通	脚部外面ヘラ削り	竈中央下層	70%
10	土師器	甕	〔21.0〕	(15.7)	－	石英・長石・針状鉱物	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ，体部外面ヘラ削り，内面ヘラナデ	竈内下層	10%
11	土師器	甑	〔26.6〕	(20.7)	－	石英・長石	明赤褐	普通	口縁部横ナデ，体部外面ヘラ削り，内面ヘラナデ	上層	20%
12	土師器	甕	20.5	28.4	〔9.4〕	石英・長石・赤色粒子	にぶい黄褐	普通	体部外面ヘラ削り	上層～下層	70%
13	土師器	甕	20.4	(39.0)	－	砂粒・長石・石英	明赤褐	普通	口縁部横ナデ，体部外面ヘラ削り，内面ナデ	下層～床面	70%
14	土師器	甕	〔33.0〕	35.5	10.0	砂粒・長石・石英・雲母	橙	普通	体部外面ヘラ削り，輪積み痕	上層	40%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質・胎土	特徴	出土位置	備考
1	支脚	(7.5)	11.5	－	420	長石・石英・雲母	円錐状，ナデ	P4付近床面	DP1

第２号住居跡（第５・６図）

位置　調査区の中央に位置する。

規模と形状　東西 3.16 m、南北 3.12 mの隅丸方形である。主軸方向はＮ－26°－Ｅである。

壁　ほぼ直立して立ち上がっている。壁高は 20cm である。

床　ほぼ平坦で、顕著な硬化面はみられなかった。壁溝は北西壁側を除き全周している。

ピット　１ヶ所。P1 は径 15 × 19cm の楕円形で、深さは 18cm である。南壁際中央部に位置し、竈に対峙することから出入り口施設に伴うピットと考えられる。主柱穴は確認できなかった。

竈　北壁際のやや東寄りに付設されている。規模は、焚口から煙道まで約 70cm、両袖部幅約 58cm で、壁外へ 60cm ほど掘り込んでいる。火床面は床面とほぼ同じ高さで、ほとんど被熱を受けていない。煙道は、火床面から外傾して緩やかに立ち上がっている。

SI-2 竈土層解説

1　暗褐色　ローム粒子・炭化粒子・雲母粒子少量、粘性なし、しまりあり
2　暗褐色　ローム粒子中量・ローム小ブロック少量、炭化粒子中量、焼土粒子少量・焼土ブロック微量、雲母粒子中量、粘性なし、しまりあり
3　暗褐色　ローム粒子中量、炭化粒子・雲母粒子少量、粘性あり、しまり強い
4　暗褐色　ローム粒子少量・ローム小ブロック中量、炭化粒子中量、焼土粒子・雲母粒子少量、粘性なし、しまりあり
5　暗褐色　ローム粒子多量、炭化粒子中量、雲母粒子少量、粘性あり、しまり強い
6　暗褐色　ローム粒子・小ブロック少量、雲母粒子微量、粘性なし、しまりあり

覆土　９層からなる。全体的に暗褐色土で、ロームブロックや雲母粒子、炭化粒子を含む。不規則な堆積状況から人為堆積と考えられる。

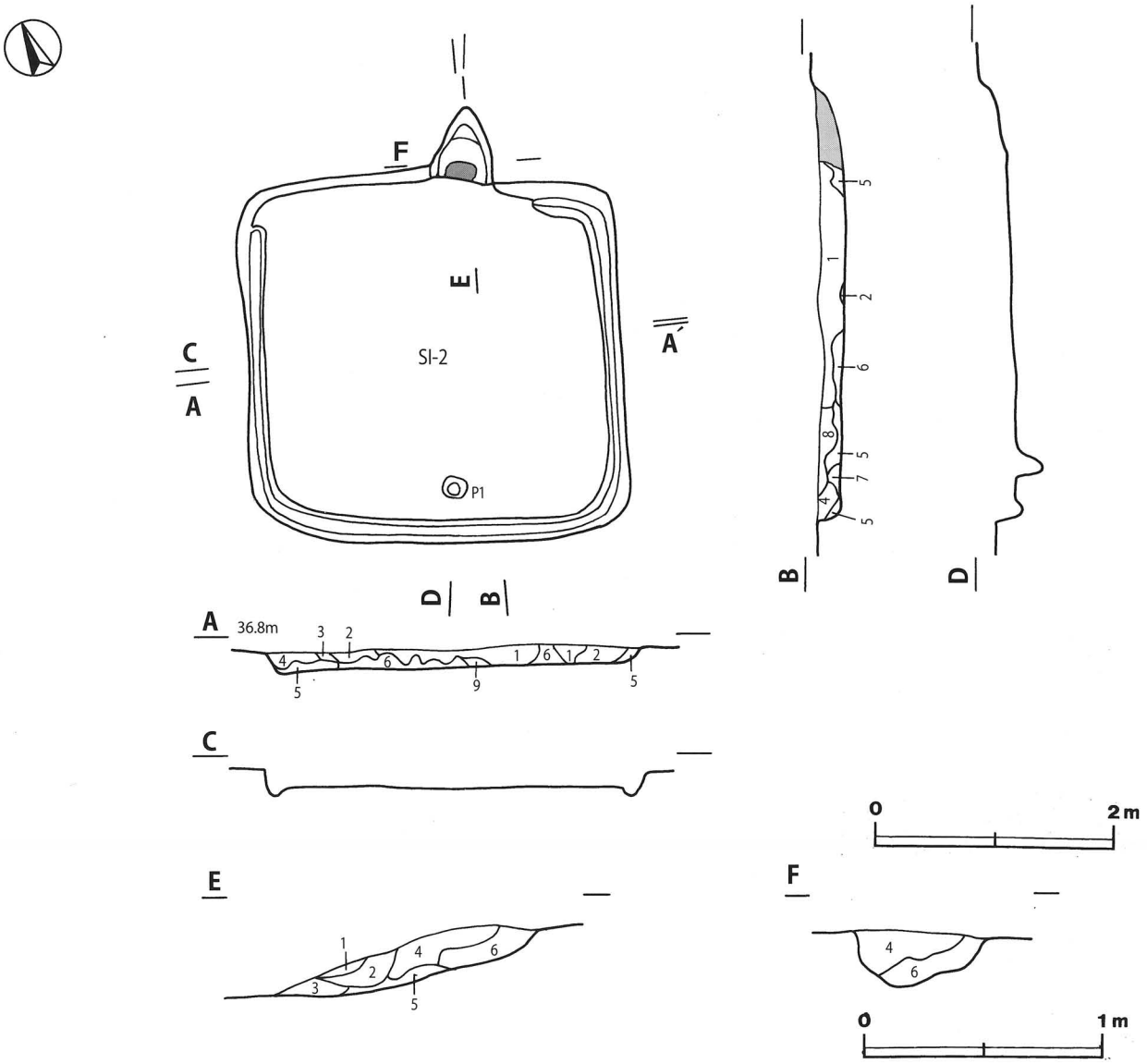
SI-2 土層解説

1　暗褐色　ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、炭化粒子少量、焼土粒子・雲母粒子微量、粘性なし、しまりなし

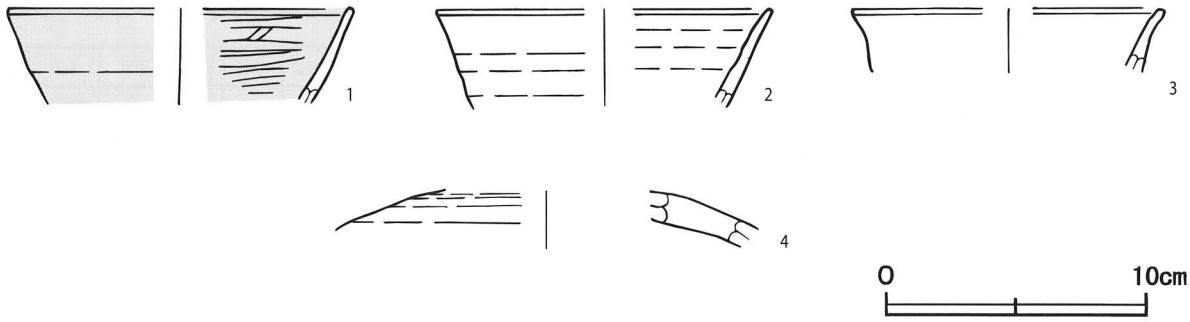
2　暗褐色　ローム粒子少量、ローム中ブロック微量、炭化粒子・雲母粒子少量、粘性なし、しまりなし
3　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量、雲母粒子微量、粘性なし、しまりあり
4　褐色　　ローム粒子少量、炭化粒子少量、雲母粒子微量、粘性なし、しまりなし
5　褐色　　ローム粒子多量、ローム中ブロック中量、炭化粒子中量、粘性なし、しまりあり
6　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック・炭化粒子中量、雲母粒子少量、粘性なし、しまりあり
7　暗褐色　ローム粒子・炭化粒子・雲母粒子少量、粘性なし、しまりなし
8　暗褐色　ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、炭化粒子少量、雲母粒子微量、粘性なし、しまりあり
9　暗褐色　ローム粒子少量、炭化粒子・焼土粒子微量、粘性なし、しまりなし

遺物出土状況　土師器片 36 点（坏 18，甕 17，甑 1）、須恵器片 13 点（坏 8，甕 4，蓋 1）、縄文土器片 2 点、弥生土器片 2 点が出土している。縄文土器片や弥生土器片は人為堆積時の混入あるいは流れ込みと考えられる。いずれも細片であるため、図示できなかった。

所見　時期は出土した土器から、奈良・平安時代と考えられる。



第 5 図 第 2 号住居跡実測図



第 6 図 第 2 号住居跡出土遺物実測図

第2表　第2号住居跡出土遺物観察表

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	坏	〔12.2〕	(3.8)	－	砂粒	にぶい黄橙	普通	内面ヘラ磨き, 内面黒色処理	覆土中	5%
2	土師器	坏	〔12.3〕	(4.1)	－	砂粒	にぶい黄橙	普通	体部ロクロナデ	覆土中	5%
3	須恵器	坏	〔12.0〕	(2.5)	－	砂粒・針状鉱物	灰	普通	ロクロナデ	覆土中	5%
4	須恵器	蓋	－	(2.3)	－	砂粒	灰白	普通	天井部回転ヘラ削り	覆土中	5%

第 3 号住居跡（第 7 図）

位置　調査区の東側に位置する。

重複関係　第 5 号住居跡の南西壁を掘り込んでいる。第 4 号柱穴跡に掘り込まれている。

規模と形状　東西 3.70m、南北 4.10m の方形で、主軸方向は N － 76°－ E である。

壁　やや外傾して立ち上がり、壁高は 5 ～ 20cm である。

床　ほぼ平坦で、顕著な硬化面は認められなかった。壁溝はほぼ全周している。

ピット　1 ヶ所。P1 は径 16cm、深さ 28cm である。西壁際中央部に位置し、竈に対峙することから出入り口施設に伴うピットと考えられる。主柱穴は確認されなかった。

竈　東壁際中央部に付設されている。攪乱を受けているため遺存状態が悪く、火床面しか確認できなかった。

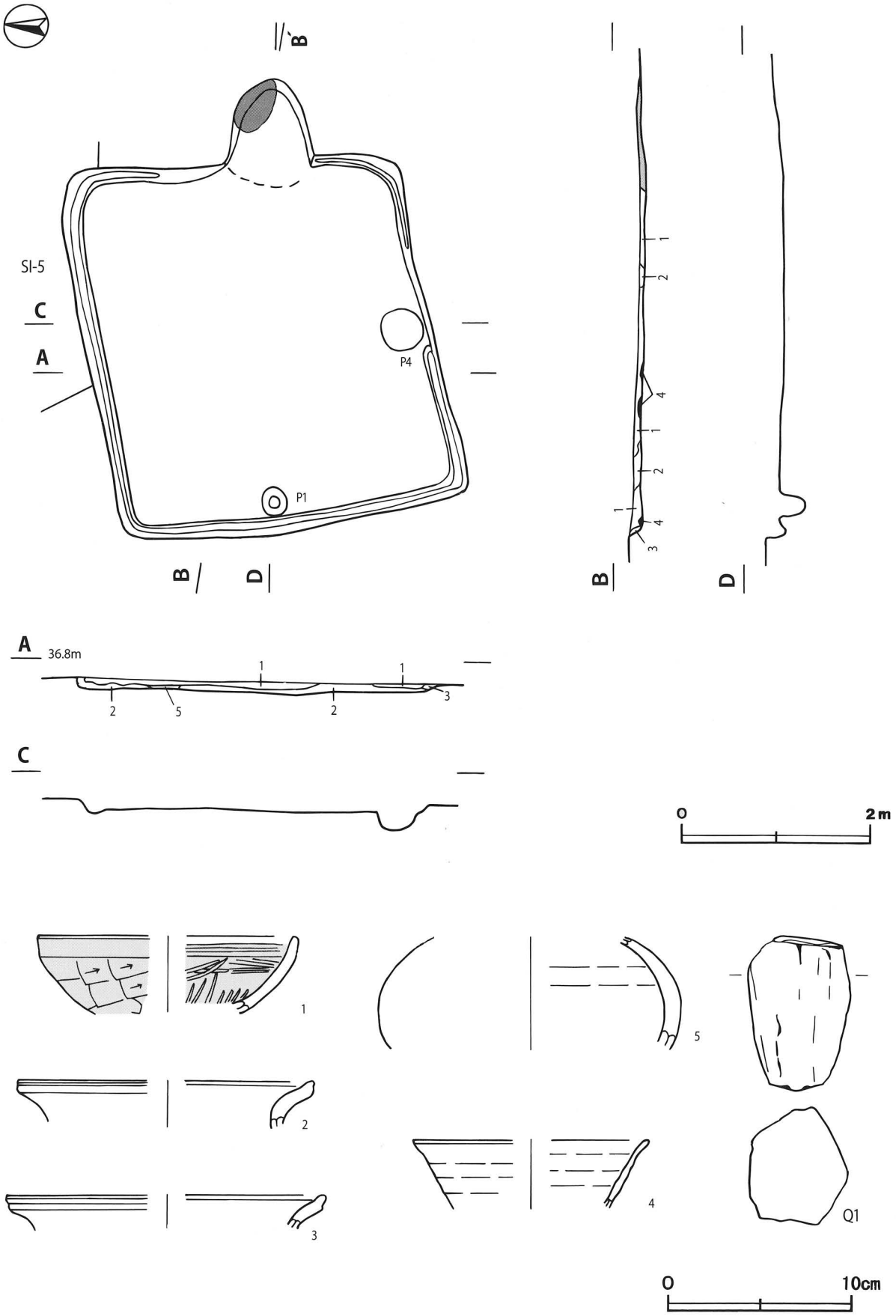
覆土　5 層からなる。全体的に暗褐色土で、ロームブロックや焼土粒子、炭化粒子を含む。不規則な堆積状況から人為堆積と考えられる。

SI-3 土層解説

1　暗褐色　ローム粒子・炭化粒子中量、粘性なし、しまりなし
2　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量、焼土粒子微量、粘性なし、しまりなし
3　暗褐色　ローム粒子多量、粘性なし、しまりあり
4　褐色　　ローム粒子多量、炭化粒子微量、粘性あり、しまり強い
5　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック中量、炭化粒子微量、粘性なし、しまりあり

遺物出土状況　土師器片 28 点（坏 7, 甕 24）、須恵器片 3 点（坏 2, 瑳1, 甕 2 点）、弥生土器片 1 点、石製品 1 点（支脚）が出土している。弥生土器片は人為堆積時の混入もしくは流れ込みによるものと考えられる。いずれも細片であり図示できなかった。

所見　時期は、第 5 号住居跡を掘り込んでいることや出土した土器から奈良・平安時代と考えられる



第７図 第３号住居跡出土遺物実測図

第3表　第3号住居跡出土遺物観察表

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	坏	〔13.6〕	(4.2)	－	長石・石英	黒褐	普通	体部外面ヘラ削り，内面ヘラ磨き	覆土中	20%
2	土師器	小形甕	〔15.6〕	(2.6)	－	長石・石英	灰褐	普通	口縁部横ナデ	覆土中	5%
3	土師器	小形甕	〔17.0〕	(1.9)	－	長石・石英	橙	普通	口縁部横ナデ	覆土中	5%
4	須恵器	坏	〔12.6〕	(3.8)	－	長石・石英・針状鉱物	灰	良好	体部ロクロナデ	覆土中	10%
5	須恵器	甕	－	6.2	－	長石・石英	灰	良好	体部ロクロナデ	覆土中	10%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	特徴	出土位置	備考
1	支脚	8.3	5.6	6.3	430	円柱状	覆土中	Q1

第４号住居跡（第８・９図）

位置　調査区の東側に位置する。

規模と形状　東西 3.95 m、南北 4.0m の方形で、主軸方向は N － 70°－ W である。

壁　やや外傾して立ち上がり、壁高は 10 ～ 15cm である。

床　ほぼ平坦で、中央部がよく踏み固まっている。壁溝は、南東コーナー部が調査区外のため確認できなかったが、ほぼ全周していると考えられる。

ピット　１ヶ所。P1 は径 20cm、深さ 10cm である。東壁際中央部に位置し、竈に対峙することから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。主柱穴は確認できなかった。

竈　西壁側やや北寄りに付設されている。規模は、焚口から煙道まで約 100cm、両袖部幅約 68cm で、壁外へ 40cm ほど掘り込んでいる。火床面は床面を 5cm ほど皿状に掘り込んでおり、被熱を受けて赤変硬化している。煙道は、火床面から外傾して緩やかに立ち上がっている。

SI-4 竈土層解説

1　暗赤褐色　ローム粒子微量、炭化粒子中量、焼土粒子多量・焼土ブロック中量、粘土粒子少量、粘性なし、しまりなし
2　暗赤褐色　ローム粒子中量、炭化粒子中量、焼土粒子多量・焼土ブロック多量、粘土粒子少量、粘性なし、しまりなし
3　暗赤褐色　ローム粒子・炭化粒子微量、焼土粒子・焼土小ブロック中量、粘土ブロック少量、粘性あり、しまりなし
4　暗褐色　ローム粒子・焼土粒子・焼土小ブロック中量、粘土粒子少量、粘性なし、しまりなし
5　暗褐色　ローム粒子・炭化粒子中量、粘性なし、しまりなし
6　暗褐色　ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、炭化粒子・焼土粒子中量、粘性なし、しまりなし

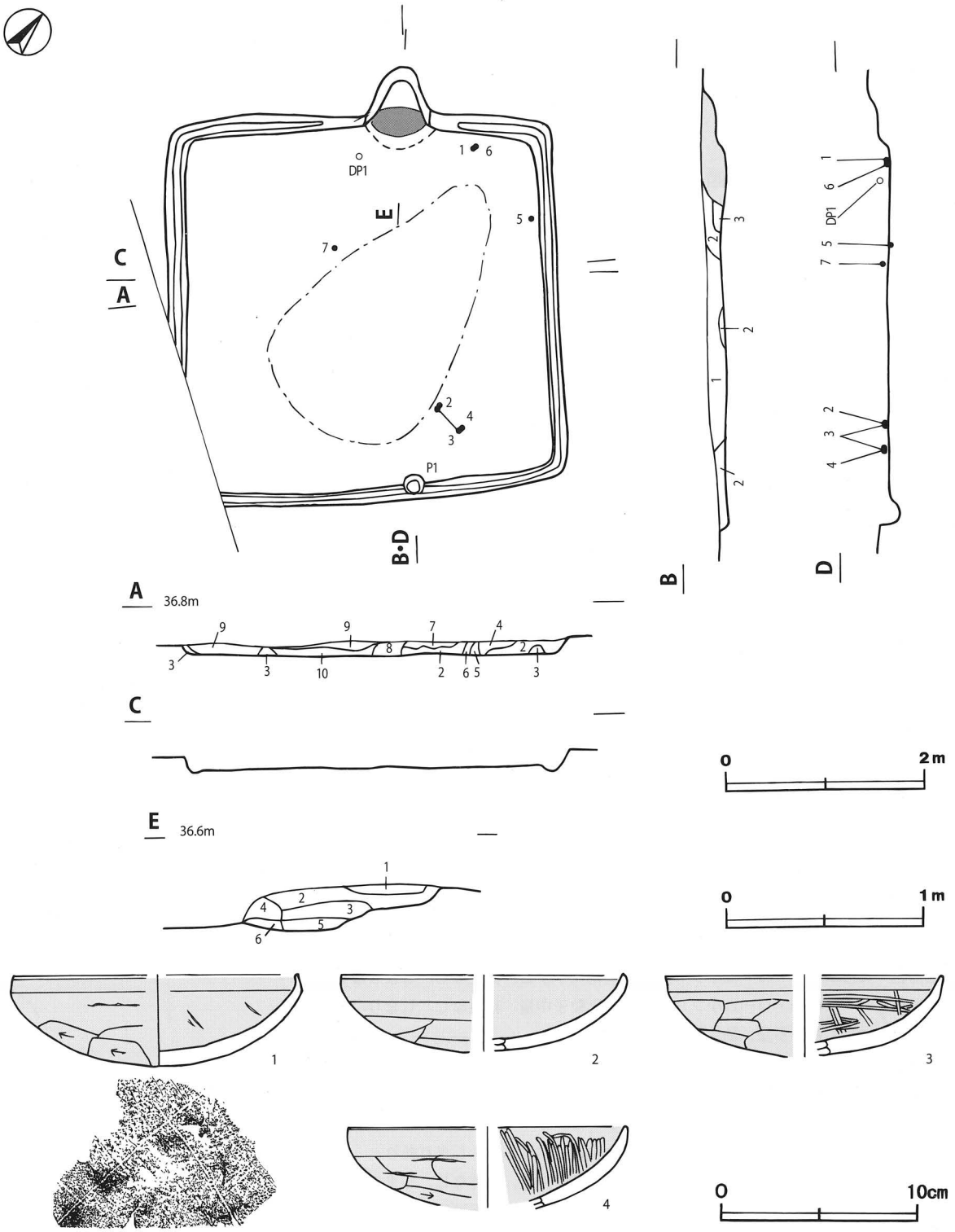
覆土　10 層からなる。全体的に暗褐色土で、ロームブロックや焼土粒子、炭化粒子を含む。不規則な堆積状況から人為堆積と考えられる。

SI-4 土層解説

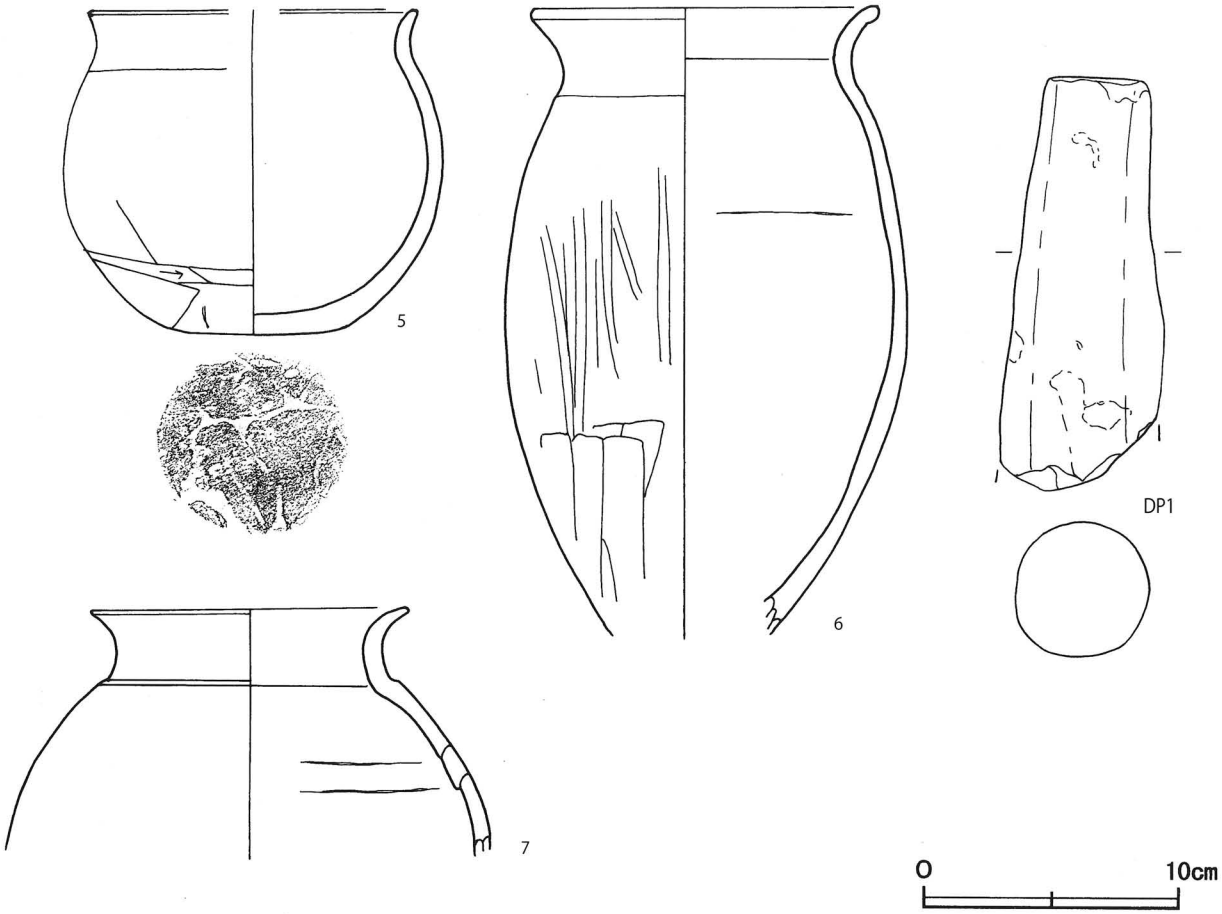
1　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック・炭化粒子少量、粘性なし、しまりなし
2　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック・炭化粒子中量、粘性なし、しまりなし
3　褐色　ローム粒子多量、粘性あり、しまりあり
4　暗褐色　ローム粒子中量、ローム大ブロック微量、炭化粒子微量、粘性なし、しまりなし
5　暗褐色　ローム粒子少量、炭化粒子微量、粘性なし、しまりあり
6　褐色　ローム粒子多量、粘性なし、しまりなし
7　褐色　ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、粘性あり、しまりあり
8　暗褐色　ローム粒子中量、炭化粒子微量、焼土粒子少量、粘性なし、しまりあり
9　暗褐色　ローム粒子中量、炭化粒子少量、焼土ブロック・雲母粒子微量、粘性なし、しまりあり
10　暗褐色　ローム粒子中量、炭化粒子微量、雲母粒子少量、粘性なし、しまりなし

遺物出土状況　土師器片 58 点（坏 33，甕 25）、須恵器片 2 点（坏，甕）、縄文土器片 2 点、弥生土器片 4 点、土製品 1 点（支脚）が出土している。縄文土器片や弥生土器片は人為堆積時の混入もしくは流れ込みによるものと考えられる。図示できたのは、8 点である。土器片は全体的に覆土下層から床面にかけてまばらに散在している。1 は正位の状態で、6 は横位の状態で北東壁際よりの床面から出土している。8 は竈西側袖部の先端部から横位の状態で出土している。

所見　時期は、出土した土器から 6 世紀末～ 7 世紀初頭と考えられる。



第 8 図 第 4 号住居跡・出土遺物実測図



第 9 図 第 4 号住居跡出土遺物実測図

第4表　第4号住居跡出土遺物観察表

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	坏	〔14.5〕	4.7	－	砂粒・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り，輪積み痕	竈付近床面	40%、底部ヘラ記号「十」
2	土師器	坏	〔14.5〕	4.0	－	砂粒・赤色粒子・雲母	にぶい褐	普通	体部外面ヘラ削り，口縁部横ナデ	P1付近床面	30%
3	土師器	坏	〔14.1〕	(4.2)	－	砂粒・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	体部外面ヘラ削り，内面ヘラ磨き	P1付近床面	40%
4	土師器	坏	〔14.3〕	(4.7)	－	砂粒・雲母	にぶい褐	普通	体部外面ヘラ削り，内面ヘラ磨き	P1付近床面	30%
5	土師器	小形甕	〔12.7〕	12.8	－	砂粒・小礫・赤色粒子	明赤褐	普通	体部外面ヘラ削り，口縁部横ナデ	北東壁際床面	60%
6	土師器	甕	17.8	〔32.5〕	－	砂粒・長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	体部外面ヘラ削り，口縁部横ナデ	竈付近床面	75%
7	土師器	甕	〔15.8〕	(13.0)	－	石英・長石・針状鉱物	明褐	普通	口縁部横ナデ	中央部床面	15%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質・胎土	特徴	出土位置	備考
1	支脚	(16.5)	6.4	－	355	長石・雲母	円柱状，ナデ	竈袖先端部	DP1

第 5 号住居跡（第 10 ～ 12 図）

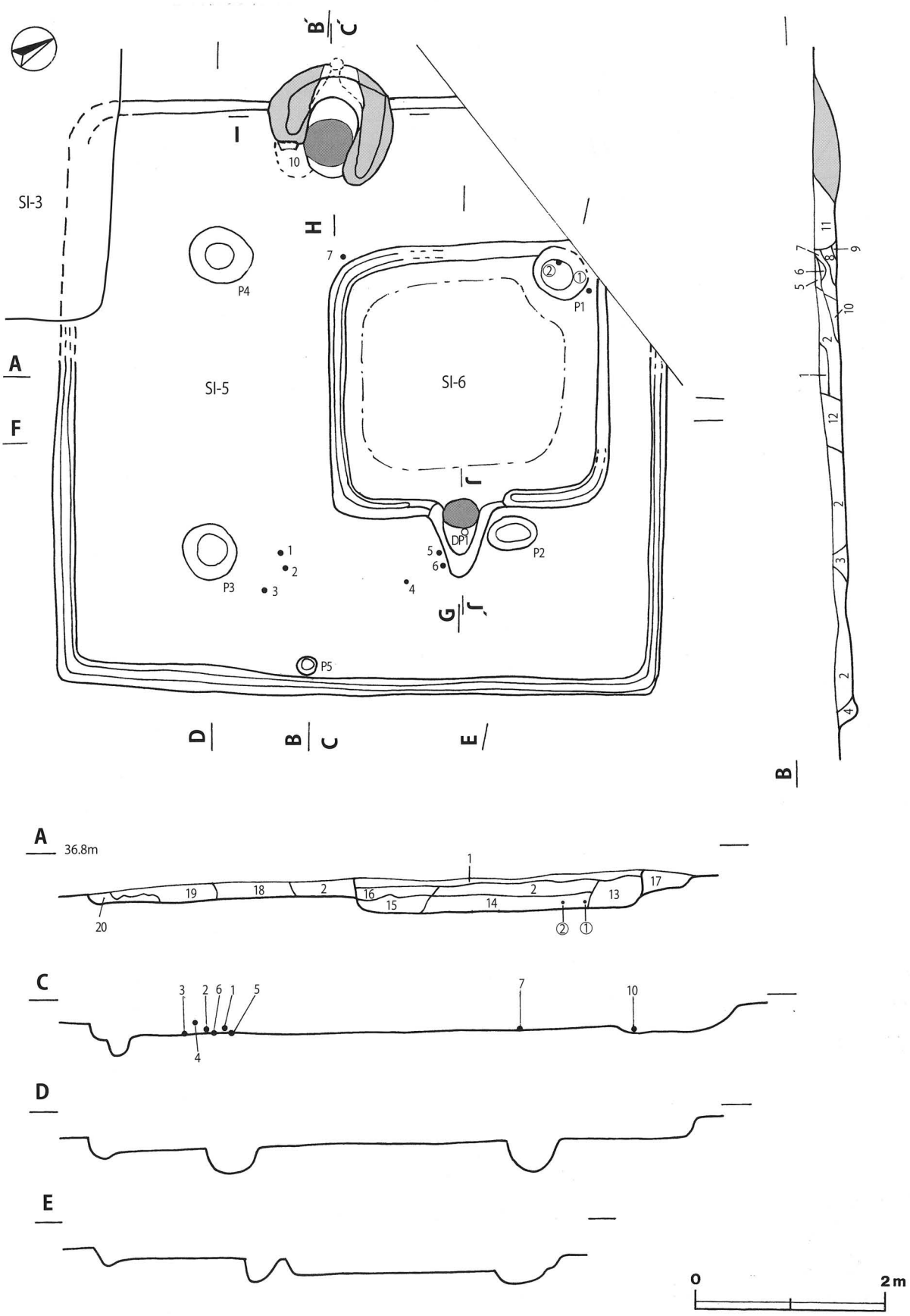
位置　調査区の東側に位置する。

重複関係　第 3 号住居跡と第 6 号住居跡に掘り込まれている。

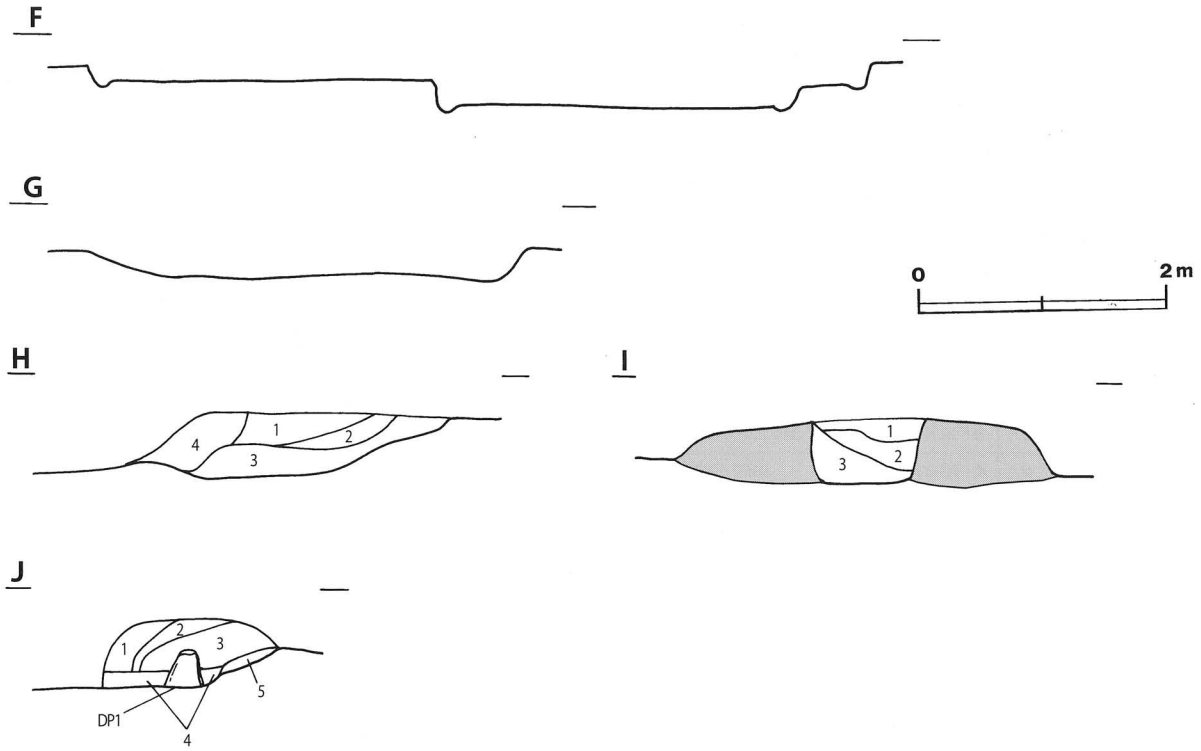
規模と形状　東西 6.50m、南北 6.40 mの方形で、主軸方向は N － 62°－ W である。

壁　ほぼ直立して立ち上がり、壁高は 14 ～ 17cm である。

床　ほぼ平坦で、顕著な硬化面は認められなかった。壁溝は北東コーナー部が調査区外のため確認できなかったが、ほぼ全周していると考えられる。



第10図 第5・6号住居跡実測図(1)



第 11 図 第 5・6 号住居跡実測図(2)

ピット　5 ヶ所。P1 ～ P4 は径 35 ～ 56cm、深さ 15 ～ 35cm で、いずれも主柱穴と考えられる。P5 は径 20cm、深さ 15cm であり、東壁際中央部に位置し、竈に対峙することから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

竈　西壁際中央部に付設されている。規模は、焚口から煙道まで約 128cm、両袖部幅約 150cm で、壁外へ 45cm ほど掘り込んでいる。袖部は甕片を芯材とし、砂質粘土で構築されている。天井部は崩落せずに残存している。火床面は床面とほぼ同じ高さの地山面を使用しており、被熱を受けて赤変硬化している。煙道は火床面から緩やかに外傾して立ち上がっている。

SI-5 竈土層解説

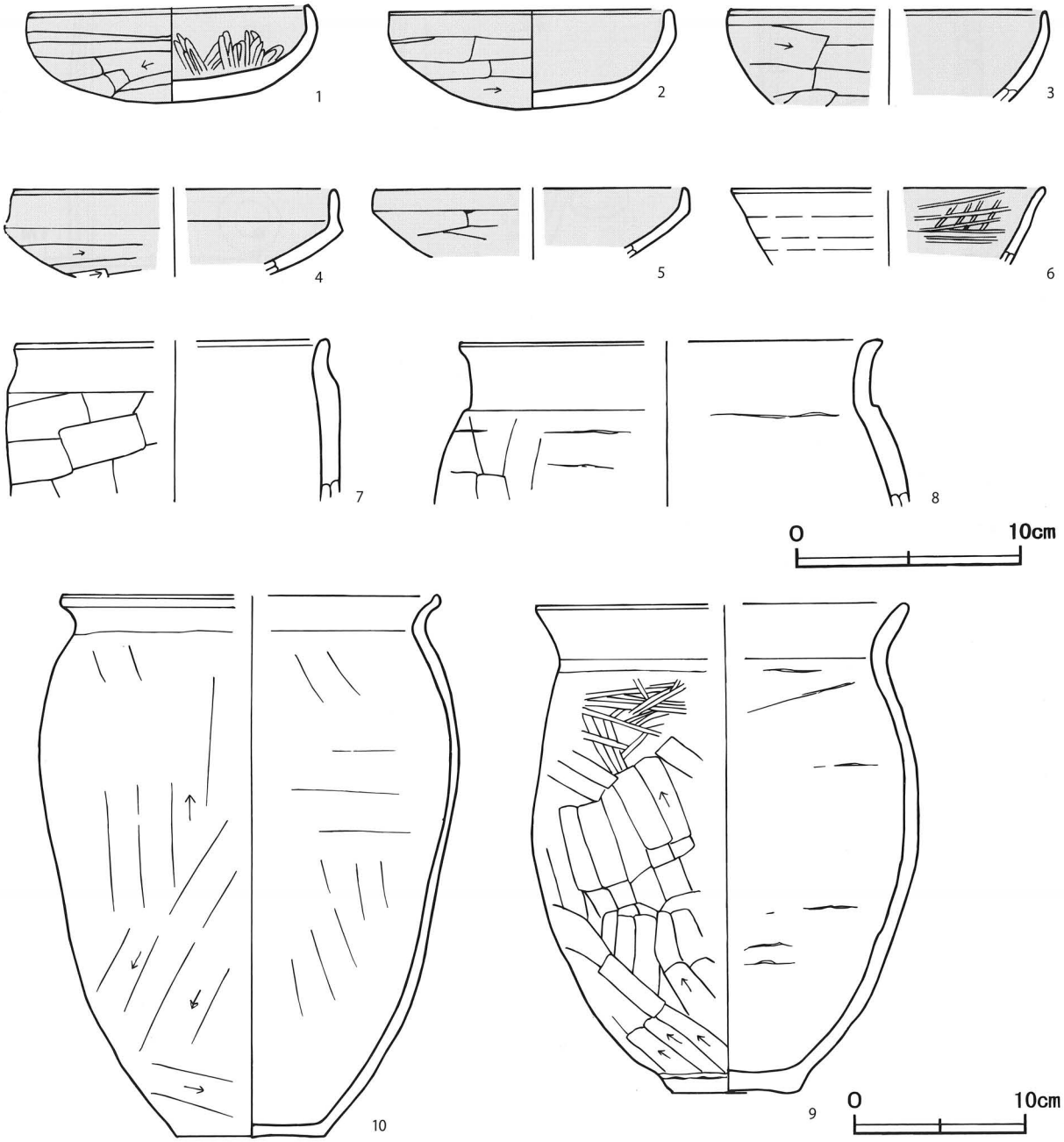
1　暗褐色　ローム粒子少量、炭化粒子中量、焼土粒子・焼土ブロック・粘土粒子少量、粘性なし、しまり強い
2　暗褐色　ローム粒子少量・ローム小ブロック中量、炭化粒子少量、焼土粒子微量、粘土粒子少量、粘性なし、しまりあり
3　暗赤褐色　ローム粒子小量、炭化粒子中量、焼土粒子多量・焼土ブロック中量、粘性なし、しまり強い
4　暗褐色　ローム粒子微量、炭化粒子・焼土粒子少量、粘土ブロック微量、粘性なし、しまりなし

覆土　14 層からなる。全体的に暗褐色土で、ロームブロックや焼土粒子、炭化粒子、雲母粒子を含む。ブロック状の堆積状況から人為堆積と考えられる。

SI-5・6 土層解説

1　暗褐色　ローム粒子中量、ローム小ブロック・中ブロック・炭化粒子・焼土粒子少量、粘性なし、しまりあり
2　暗褐色　ローム粒子少量、ローム小ブロック少量・中ブロック微量、炭化粒子中量、焼土ブロック少量、粘性なし、しまりあり
3　褐　色　ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、粘性なし、しまりあり
4　暗褐色　ローム粒子・炭化粒子少量、粘性なし、しまりなし
5　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック・炭化粒子少量、粘土粒子微量、粘性なし、しまりあり
6　暗褐色　ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、炭化粒子微量、粘性なし、しまりなし
7　暗褐色　ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、炭化粒子・焼土ブロック少量、粘性なし、しまりなし
8　暗褐色　ローム粒子微量、炭化粒子中量、焼土粒子微量、粘性なし、しまりあり

9　暗褐色　ローム粒子少量、炭化粒子・粘土粒子微量、粘性なし、しまりあり
10　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量、炭化粒子・焼土粒子微量、粘性あり、しまりなし
11　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・雲母粒子微量、粘性なし、しまりあり
12　暗褐色　ローム粒子少量、ローム小ブロック・大ブロック微量、中ブロック少量、炭化粒子中量、粘性なし、しまり強い
13　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック・炭化粒子中量、焼土ブロック少量、粘性なし、しまりあり
14　暗褐色　ローム粒子少量、ローム小ブロック中量、中ブロック微量、大ブロック少量、炭化粒子少量、粘性なし、しまりなし
15　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック・炭化粒子中量、粘性なし、しまりなし
16　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック中量・大ブロック微量、炭化粒子少量、粘性なし、しまりなし
17　暗褐色　ローム粒子少・炭化粒子少量、焼土ブロック・砂粒微量、粘性なし、しまりなし
18　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック中量・大ブロック少量、炭化粒子・焼土粒子少量、粘性なし、しまりなし
19　暗褐色　ローム粒子少量、ローム小ブロック中量、炭化粒子少量、焼土ブロック微量、粘性なし、しまりあり
20　暗褐色　ローム粒子多量、炭化粒子少量、焼土粒子微量、粘性なし、しまりなし



第12図 第5号住居跡出土遺物実測図

遺物出土状況　土師器片 119 点（坏 48，甕 70，甑 1）、須恵器片 4 点（甕）、弥生土器片 17 点、が出土している。弥生土器片は人為堆積時の混入もしくは流れ込みによるものと考えられる。土器片はほとんどが細片であるため図示できたのは、8 点である。1 ～ 4 は出入り口ピット付近の覆土上層から床面にかけて出土している。10 は竈袖部下層から出土しており、第 6 号住居跡の竈袖部出土の甕片と接合できる。

所見　時期は、第 3 号住居跡と第 6 号住居跡に掘り込まれていることや出土した土器から 6 世紀末～ 7 世紀初頭と考えられる。

第5表　第5号住居跡出土遺物観察表

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	坏	12.3	4.2	－	砂粒	にぶい黄褐	普通	体部外面ヘラ削り，内面ヘラ磨き	P5付近下層	70%
2	土師器	坏	12.4	4.6	－	砂粒・赤色粒子	灰黄褐	普通	体部外面ヘラ削り	P5付近下層	70%
3	土師器	坏	〔13.9〕	〔4.3〕	－	砂粒	明赤褐	普通	体部外面ヘラ削り	P5付近床面	20%
4	土師器	坏	〔14.2〕	(4.1)	－	砂粒・赤色粒子	にぶい褐	普通	体部外面ヘラ削り	P5付近上層	5%
5	土師器	坏	〔13.8〕	(3.2)	－	砂粒	にぶい黄褐	普通	体部外面ヘラ削り	床面	5%
6	土師器	坏	〔13.8〕	(3.5)	－	砂粒	にぶい黄橙	普通	体部外面ロクロナデ，内面ヘラ磨き，内面黒色処理	床面	5%
7	土師器	小形甕	〔13.7〕	(7.2)	－	砂粒・長石・石英	橙	普通	体部外面ヘラ削り	竈付近中層	10%
8	土師器	甕	〔18.8〕	(9.5)	－	砂粒・金雲母・長石・石英	明赤褐	普通	口縁部横ナデ，体部外面ヘラ削り，輪積み痕	覆土中	5%
9	土師器	甕	〔21.5〕	29.0	7.6	砂粒・石英・長石	にぶい赤褐	普通	体部外面ヘラ削り，ヘラ磨き，体部内面ナデ，輪積み痕	覆土中	70%
10	土師器	甕	〔21.8〕	32.0	8.7	砂粒・赤色粒子	浅黄橙	普通	口縁部横ナデ，体部外面ヘラ削り	竈袖下層	80%

第 6 号住居跡（第 10・13 図）

位置　調査区の東側に位置する。

重複関係　第 5 号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状　東西 2.85 m、南北 3.0 mの隅丸方形である。主軸方向はＮ－ 115°－Ｅである。

壁　ほぼ直立して立ち上がっており、壁高は 22cm である。

床　ほぼ平坦で、全体的によく踏み固められている。壁溝は全周している。

ピット　確認できなかった。

竈　東壁際中央部に付設されている。規模は、焚口から煙道まで約 70cm、袖部幅約 75cm で、壁外へ 62cm ほど掘り込んでいる。袖部は甕片を芯材とし、砂質粘土で構築されている。火床面は床面と同じ地山面を使用しており、被熱を受けて赤変硬化している。煙道の立ち上がり部に土製支脚が据えられている。煙道は、火床面から外傾して緩やかに立ち上がっている。

SI-6 竈土層解説

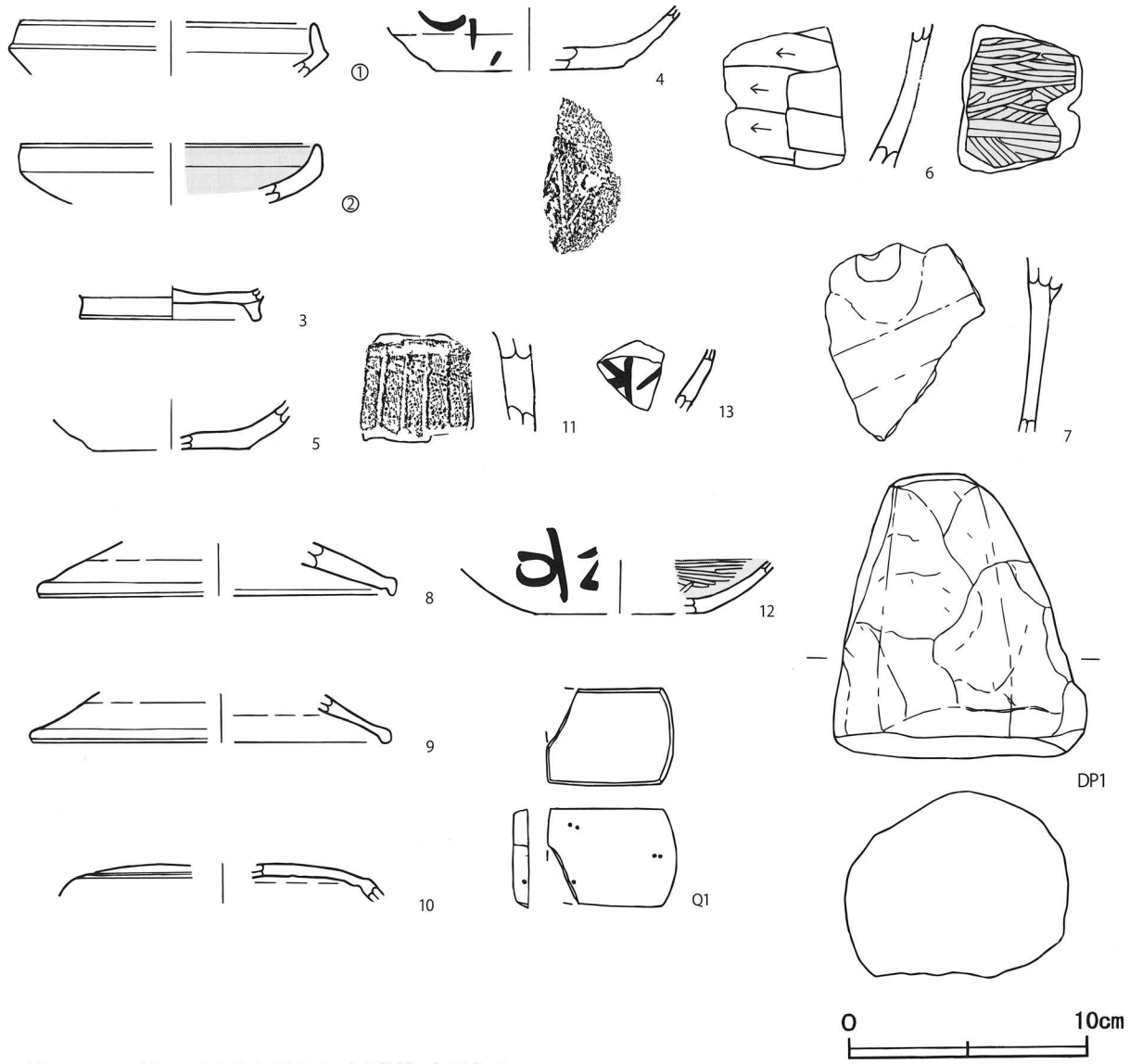
1　暗灰黄色　ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子中量、雲母粒子多量、粘性なし、しまりあり
2　暗褐色　ローム粒子・炭化粒子・雲母粒子少量、粘性なし、しまりあり
3　暗赤褐色　ローム粒子微量、炭化粒子中量、焼土粒子多量・焼土小ブロック中量、雲母粒子多量、粘性なし、しまりあり
4　暗赤褐色　ローム粒子少量、炭化粒子中量、焼土粒子多量、雲母粒子少量、粘性なし、しまりなし
5　褐色　ローム粒子多量、雲母粒子少量、粘性なし、しまりあり

覆土　6 層からなる。全体的に暗褐色土で、ロームブロックを多く含むことから人為堆積であると考えられる。

遺物出土状況　土師器片 129 点（坏 26，高坏 1，甕 102）、須恵器片 25 点（坏 3，甕 7，甑 4，蓋 2，円面硯 1）、灰釉陶器片 1 点、弥生土器片 8 点、土製品 1 点（支脚）、石製品 1 点（蛇尾）が出土している。弥生土器片は人為堆積時の混入もしくは流れ込みによるものと考えられる。土器片のほとんどが細片であるため図示できたのは、

2点のみである。①・②は北西コーナー壁際覆土下層より出土している。土師器甕の破片が竈中心部中層から重なって出土しており、住居廃絶後に投げ込まれた可能性が高い。また、墨書土器片3点（「○万」）が覆土中から出土している。

所見　時期は、第5号住居跡を掘り込んでいることや出土した土器などから9世紀中葉と考えられる。



第13図 第6号住居跡出土遺物実測図

第6表　第6号住居跡出土遺物観察表

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
①	土師器	坏	〔12.2〕	(2.3)	－	砂粒	浅黄橙	普通	口縁部横ナデ	下層	5%
②	土師器	坏	〔12.2〕	(2.5)	－	砂粒	にぶい橙	普通	輪積み痕	下層	5%
3	土師器	高台付坏	－	(1.3)	7.6	砂粒・長石・石英	橙	普通	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け，内面ヘラ磨き・内面黒色処理	覆土中	10%
4	須恵器	坏	－	(2.7)	〔8.0〕	砂粒	オリーブ灰	普通	底部回転ヘラ削り	覆土中	10%・体部外面墨書「□万」・底部ヘラ記号「z」
5	須恵器	坏	－	(2.1)	〔6.6〕	砂粒・赤色粒子	浅黄	普通	底部回転ヘラ削り	覆土中	10%
6	土師器	甕	－	(6.2)	－	砂粒・雲母	橙	普通	体部外面ヘラ削り・内面ヘラ磨き	覆土中	5%
7	須恵器	甑	－	(8.3)	－	砂粒・白雲母	灰白	普通	把手貼り付け	覆土中	5%
8	須恵器	蓋	－	(1.7)	〔15.0〕	砂粒・黒色粒子	灰	良好	天井部回転ヘラ削り	覆土中	5%，口縁部に自然釉

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
9	須恵器	蓋	－	(1.8)	〔15.8〕	砂粒・石英	灰	普通	天井部回転ヘラ削り	覆土中	5%
10	灰釉陶器	蓋	－	(3.0)	－	砂粒	灰白	普通		覆土中	20%
11	須恵器	円面硯	－	(4.3)	－	砂粒・石英	オリーブ灰	普通	脚部横ナデ, 間に4条の刻み	覆土中	5%
12	土師器	坏	－	(2.3)	－	砂粒	橙	普通	内面ヘラ磨き, 黒色処理	覆土中	5%, 体部外面墨書「□万」
13	土師器	坏	－	(2.9)	－	砂粒	灰	普通		覆土中	5%, 体部外面墨書「□万」

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質・胎土	特徴	出土位置	備考
1	蛇尾	5.4	4.1	0.6	30	石英	表面が摩滅している。裏面に5ヵ所の穿孔あり	覆土中	Q1
2	支脚	16.0	14.0	11.5	1830	長石・小礫	円錐状。	竈中央	DP1

第７号住居跡（第 14 ～ 16 図）

位置　調査区の最東端に位置する。

規模と形状　住居跡東側半分は削平され、床面を残すのみである。東西 5.35m、南北 5.12m の方形で、主軸方向は N － 15°－ W である。

壁　やや外傾して立ち上がり、壁高は 23 ～ 36cm である。

床　ほぼ平坦である。

ピット　湧水のため確認できなかった。

竈　北壁際中央部に付設されている。両袖部は撹乱を受けており、西側袖部のみやや残存している。規模は、焚口から煙道まで約 116cm で、壁外へ 23cm ほど掘り込んでいる。火床面は床面と同じ地山面を使用しており、被熱を受けて赤変硬化している。土製支脚が西袖部寄りに据えられている。煙道は、火床面から外傾して緩やかに立ち上がっている。

SI-7 竈土層解説

1　暗灰黄色　ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子中量、粘土粒子多量、粘性なし、しまりなし
2　黒褐色　　ローム粒子・炭化粒子中量、焼土粒子、粘性なし、しまりあり
3　黒褐色　　ローム粒子少量、炭化粒子・焼土粒子微量、雲母粒子微量、粘性なし、しまりなし

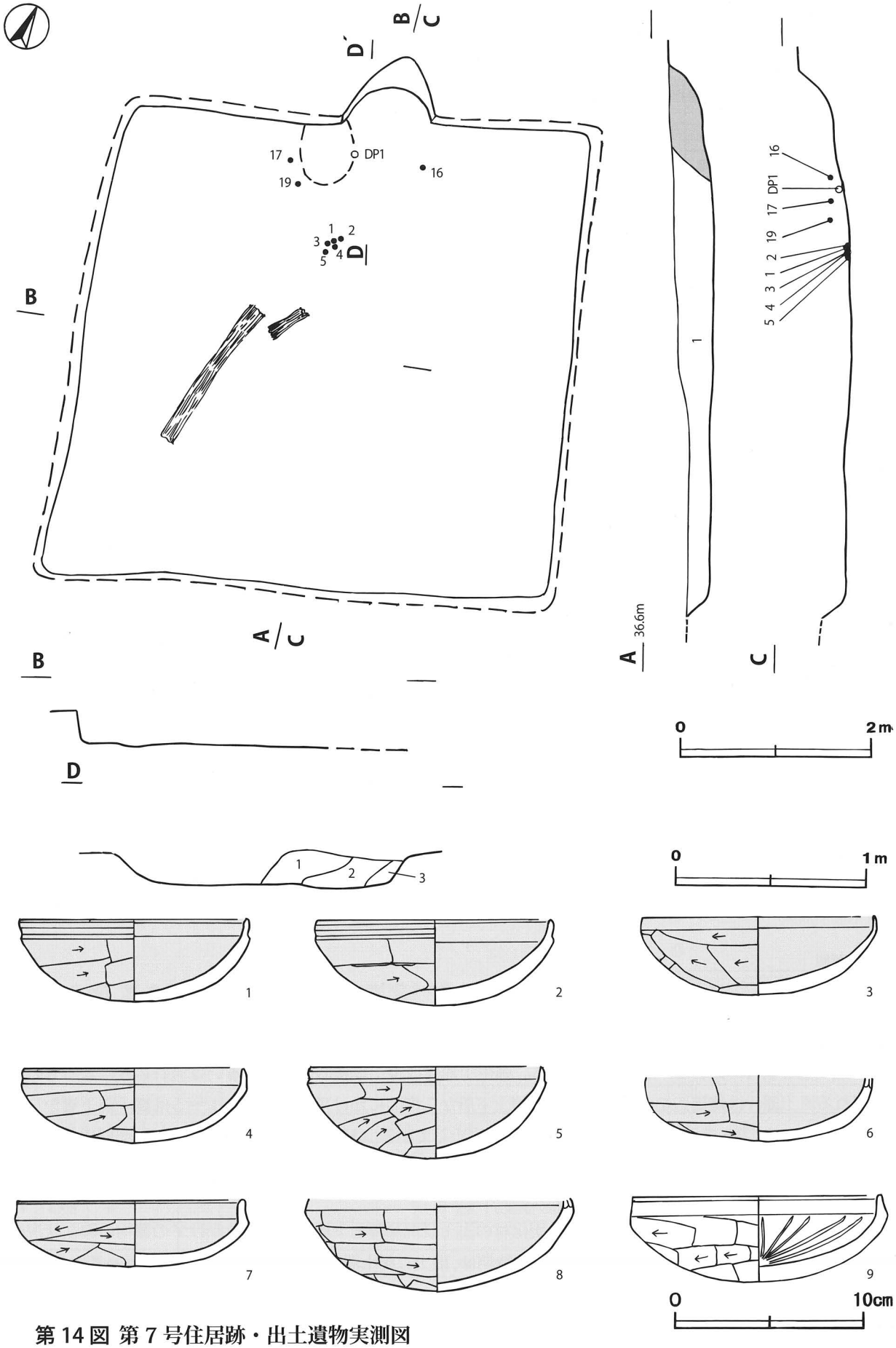
覆土　単一層である。湧水のため分層が困難であり、堆積状況は不明である。

SI-7 土層解説

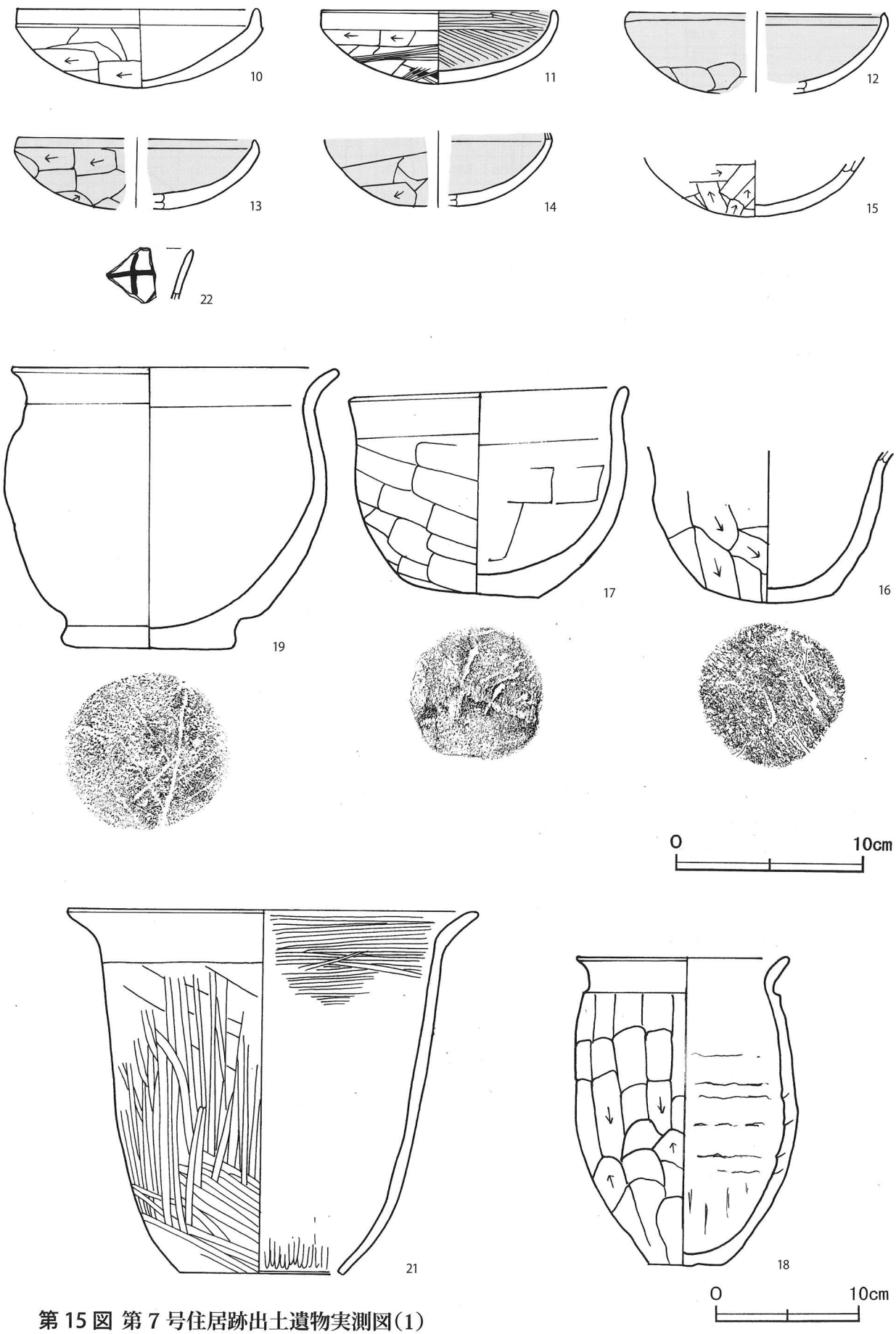
1　暗褐色　　ロームブロック・炭化粒子少量、粘性あり、ややしまりあり

遺物出土状況　土師器片 170 点（坏 28，高坏 2，甕 123，甑 7）、須恵器片 1 点（坏）、弥生土器片 15 点、石製品 3 点（磨り石 1，砥石 2）が出土している。弥生土器片は覆土堆積時の混入あるいは流れ込みによるものと考えられる。土器片は竈周辺を中心に散在し、覆土下層から床面にかけてみられる。1 ～ 5 は竈手前下層から重なり出土している。16 は正位の状態で覆土下層から出土している。17・19 は横位の状態で西袖部周辺の覆土下層から出土している。墨書土器片 1 点（「十」？）が確認されたが、覆土上層から出土しているため混入の可能性がある。

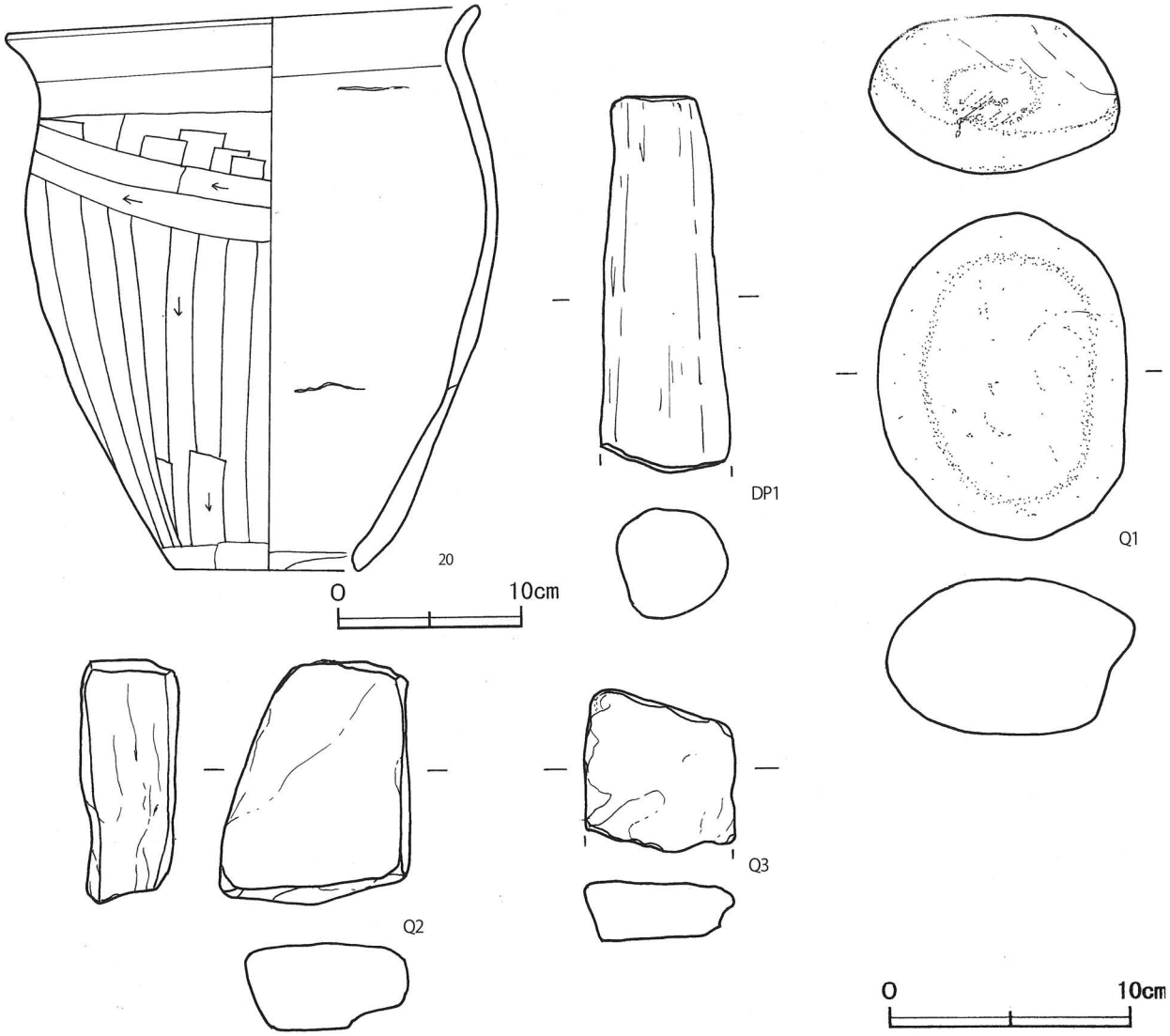
所見　この住居は、竈手前から南西側床面の炭化材の出土状況や覆土下層から床面にかけての遺物の散在状況からみて住居廃絶時に焼失したものと考えられる。時期は、出土した土器から 6 世紀末～ 7 世紀初頭と考えられる。



第14図 第7号住居跡・出土遺物実測図



第 15 図 第 7 号住居跡出土遺物実測図(1)



第 16 図 第 7 号住居跡出土遺物実測図(2)

第7表　第7号住居跡出土遺物観察表

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	坏	12.0	4.3	－	砂粒	暗赤褐	普通	体部外面ヘラ削り	竈付近下層	98%
2	土師器	坏	12.4	4.5	－	砂粒・白色粒子	暗赤褐	普通	体部外面ヘラ削り	竈付近下層	98%
3	土師器	坏	12.2	4.2	－	砂粒・赤色粒子	明赤褐	普通	体部外面ヘラ削り	竈付近下層	98%
4	土師器	坏	11.5	4.0	－	砂粒・白色粒子・石英	明赤褐	普通	体部外面ヘラ削り	竈付近下層	98%
5	土師器	坏	12.3	4.9	－	石英・長石	黒褐	普通	体部外面ヘラ削り	竈付近下層	100%
6	土師器	坏	－	(3.3)	－	砂粒・白色粒子・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	体部外面ヘラ削り	覆土中	80%
7	土師器	坏	11.8	3.5	－	砂粒・白色粒子・赤色粒子	灰黄	普通	体部外面ヘラ削り	覆土中	98%
8	土師器	坏	－	(4.9)	－	石英・長石	橙	普通	体部外面ヘラ削り	覆土中	90%
9	土師器	坏	13.0	4.6	－	砂粒・赤色粒子・白色粒子	にぶい黄橙	普通	体部外面ヘラ削り, 内面ヘラ磨き	覆土中	98%
10	土師器	坏	12.7	4.3	－	砂粒・赤色粒子	浅黄橙	普通	体部外面ヘラ削り	覆土中	98%
11	土師器	坏	12.4	4.0	－	石英・長石・針状鉱物	にぶい赤褐	普通	体部外面ヘラ削り後磨き, 内面ヘラ磨き	覆土中	60%
12	土師器	坏	〔13.6〕	(4.3)	－	砂粒・白色粒子	黒褐	普通	体部外面ヘラ削り	覆土中	30%
13	土師器	坏	〔12.5〕	(3.8)	－	砂粒・赤色粒子	黒褐	普通	体部外面ヘラ削り	覆土中	30%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
14	土師器	坏	－	(4.0)	－	砂粒・赤色粒子・針状鉱物	黒褐	普通	体部外面ヘラ削り	覆土中	25%
15	土師器	坏	－	(3.2)	－	石英・長石	灰黄褐	普通	体部外面ヘラ削り	覆土中	30%
16	土師器	小形甕	－	(8.1)	7.0	砂粒・石英・長石	赤褐	普通	体部外面ヘラ削り	竈付近下層	80%
17	土師器	小形甕	14.8	11.4	7.0	石英・長石・針状鉱物		普通	体部外面ヘラ削り	竈付近下層	95%
18	土師器	甕	14.7	22.6	5.6	砂粒・長石・石英・雲母	明赤褐	普通	体部外面ヘラ削り, 輪積み痕	竈付近床面	90%
19	土師器	小形甕	17.1	15.1	8.0	石英・長石	黒褐	普通	底部木葉痕	竈付近下層	90%, 内外面煤付着
20	土師器	甕	25.3	31.3	10.0	石英・長石・赤色粒子	浅黄橙	普通	体部外面ヘラ削り, 口縁部横ナデ	竈付近下層	98%
21	土師器	甑	28.6	26.0	11.5	砂粒・石英・長石・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	体部内外面ヘラ磨き	竈付近下層	95%
22	土師器	坏	－	(2.7)	－	砂粒	にぶい黄橙	普通		覆土中	5%, 体部外面墨書「十」カ

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質・胎土	特徴	出土位置	備考
1	磨り石	13.7	10.4	6.7	1250	砂岩	側面に擦痕	覆土中	Q1
2	砥石	10.3	8.0	4.0	135	砂岩	一面使用。	覆土中	Q2
3	砥石	(6.8)	5.3	2.3	450	砂岩	一面使用, 被熱により一部赤変	覆土中	Q3
4	支脚	(15.8)	5.4	－	420	長石・石英・雲母	円柱状, ナデ	竈内西袖部寄り	95% DP1

（2） 土　坑

第１号土坑（第 17 図）

位置　調査区の中央に位置する。

規模と形状　長軸 1.7m，短軸 1.0m の八の字形である。深さは 20cm で、壁は外傾して立ち上がっている。底面は平坦である。

覆土　２層からなり、ロームブロックを多く含む堆積状況から人為堆積と考えられる。

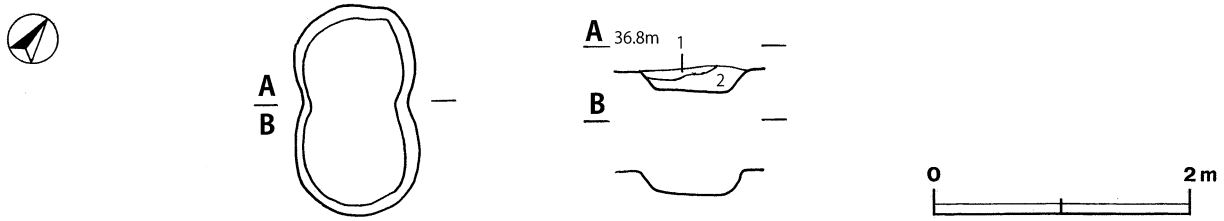
SK-1 土層解説

1　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック中量、炭化粒子少量、粘性なし、しまりなし

2　暗褐色　ローム粒子中量、ローム小ブロック多量、炭化粒子中量、焼土ブロック少量、粘性あり、しまり強い

遺物出土状況　土師器片１点（坏）、須恵器片２点（坏，甕）、弥生土器片１点が出土している。弥生土器片は人為堆積時の混入によるものと考えられる。いずれも細片であり、図示できなかった。

所見　時期は、出土土器から奈良・平安時代と考えられる。



第 17 図 第１号土坑実測図

第２号土坑（第 18 図）

位置　調査区の中央に位置する。

規模と形状　長径 1.3m，短径 1.08m の楕円形である。深さは 28cm で、壁は外傾して立ち上がっている。底面は平坦である。

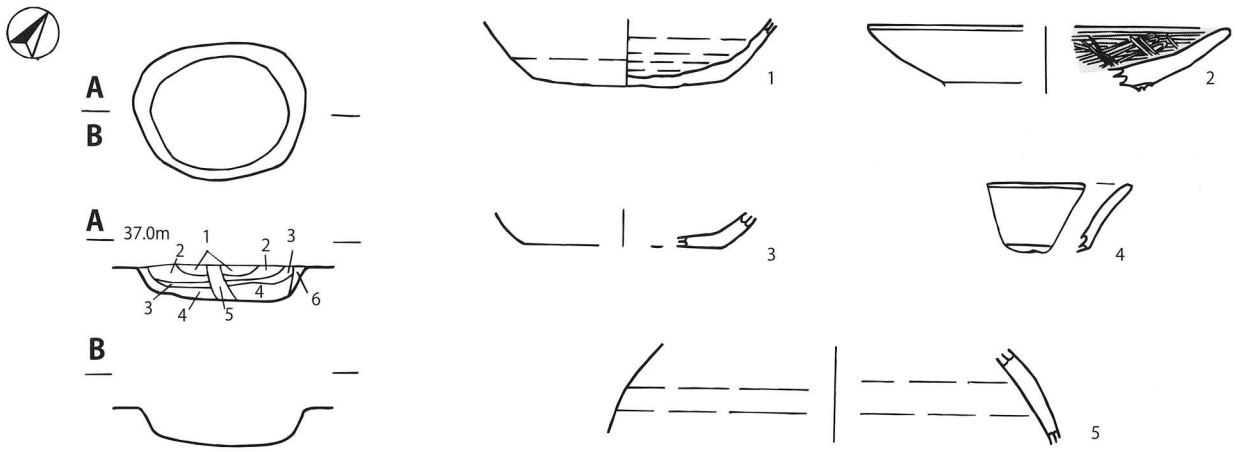
覆土　６層からなる。全体的に暗褐色土で、ロームブロックを多く含む堆積状況から人為堆積と考えられる。

SK-2 土層解説

1　暗褐色　ローム粒子中量、粘性なし、しまり弱い
2　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック中量、焼土粒子微量、粘性なし、しまりあり
3　暗褐色　ローム粒子中量、焼土粒子微量、炭化粒子少量、粘性なし、しまり弱い
4　暗褐色　ローム粒子中量、ローム中ブロック多量、炭化粒子微量、粘性なし、しまり弱い
5　暗褐色　ローム小ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子少量、粘性なし、しまり弱い
6　褐色　　ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、粘性なし、しまり弱い

遺物出土状況　土師器片 7 点（坏 3，甕 4）、須恵器片 3 点（坏 2，瓶 1）、弥生土器片 4 点が出土している。弥生土器片は人為堆積時の混入によるものと考えられる。

所見　時期は、出土土器から 9 世紀前葉と考えられる。



第 18 図 第 2 号土坑・出土遺物実測図

第8表　第2号土坑出土遺物観察表

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	坏	－	(2.7)	〔7.2〕	石英・長石	にぶい黄橙	普通	底部回転ヘラ削り	覆土中	10%
2	土師器	高台付坏	〔13.8〕	(2.4)	－	石英・長石	にぶい黄橙	普通	内面ヘラ磨き, 内面黒色処理	覆土中	10%
3	須恵器	坏	－	(1.4)	〔7.6〕	石英・長石・針状鉱物	暗灰黄	良好		覆土中	5%
4	須恵器	高台付坏	－	(2.7)	－	石英・長石	灰	良好	口縁部ロクロナデ	覆土中	5%
5	須恵器	瓶	－	(3.7)	－	石英・長石	灰	良好	体部ロクロナデ	覆土中	5%

第 3 号土坑（第 19 図）

位置　調査区の中央に位置する。

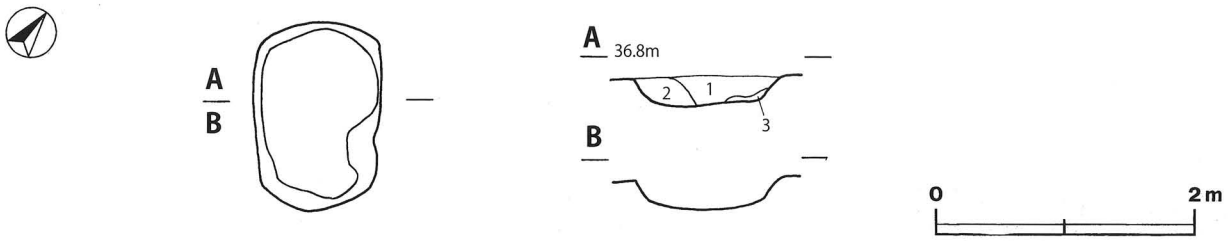
規模と形状　長軸 1.5m，短軸 1.02m の隅丸長方形である。深さは 24cm で、壁は外傾して立ち上がっている。底面は平坦である。

覆土　3 層からなる。全体的に暗褐色土で、ロームブロックや焼土ブロックを含む堆積状況から人為堆積と考えられる。

SK-3 土層解説

1　暗褐色　ローム粒子中量、ローム小ブロック・大ブロック少量、焼土ブロック微量、粘性なし、しまりなし
2　暗褐色　ローム粒子少量、ローム中ブロック中量、粘性なし、しまりなし
3　暗褐色　ローム粒子少量、炭化粒子微量、粘性なし、しまりなし

遺物出土状況　弥生土器片１点が出土している。人為堆積時の混入もしくは流れ込みによるものと考えられる。
所見　時期は不明である。



第 19 図 第 3 号土坑実測図

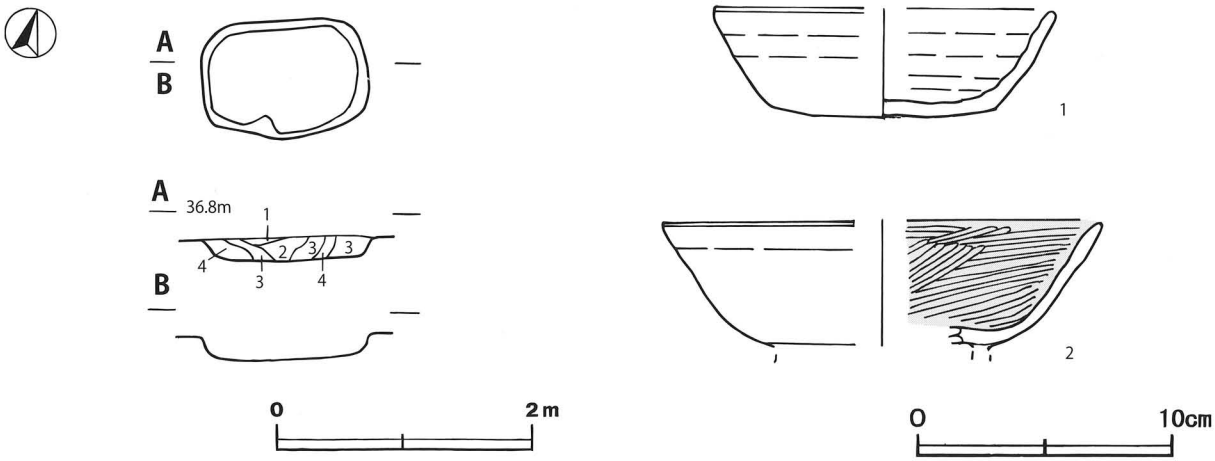
第４号土坑（第 20 図）

位置　調査区の中央に位置する。
規模と形状　長軸 1.35m, 短軸 0.95m の隅丸長方形である。深さは 15cm で、壁はやや外傾して立ち上がっている。底面は平坦である。
覆土　４層からなる。全体的に暗褐色土で、ロームブロックを多く含む堆積状況から人為堆積と考えられる。

SK-4 土層解説

1　暗褐色　ローム粒子中量、ローム中ブロック少量・大ブロック少量、粘性なし、しまりなし
2　暗褐色　ローム粒子少量、ローム小ブロック多量・中ブロック・大ブロック微量、焼土粒子少量、粘性なし、しまりなし
3　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック中量、ローム中ブロック微量、炭化粒子少量、焼土ブロック微量、粘性なし、しまりあり
4　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック多量、炭化粒子少量、粘性なし、しまりなし

遺物出土状況　土師器片７点（坏４，甕３）、須恵器片１点（坏）が出土している。
所見　時期は、出土土器から９世紀前葉と考えられる。



第 20 図 第 4 号土坑・出土遺物実測図

第9表　第4号土坑出土遺物観察表

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	坏	〔13.4〕	4.3	8.8	石英・長石・雲母	明赤褐	普通	内面ロクロナデ, 底部回転ヘラ切り	覆土中	50%
2	土師器	高台付坏	〔17.0〕	(4.9)	－	石英・長石・雲母・針状鉱物	にぶい黄褐	普通	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け, 内面ヘラ磨き, 内面黒色処理	覆土中	30%

第5号土坑（第21・22図）

位置　調査区の中央に位置する。

重複関係　第6号土坑に掘り込まれている。

規模と形状　長軸1.25m，短軸1.0mの隅丸長方形である。深さは26cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。底面は平坦である。

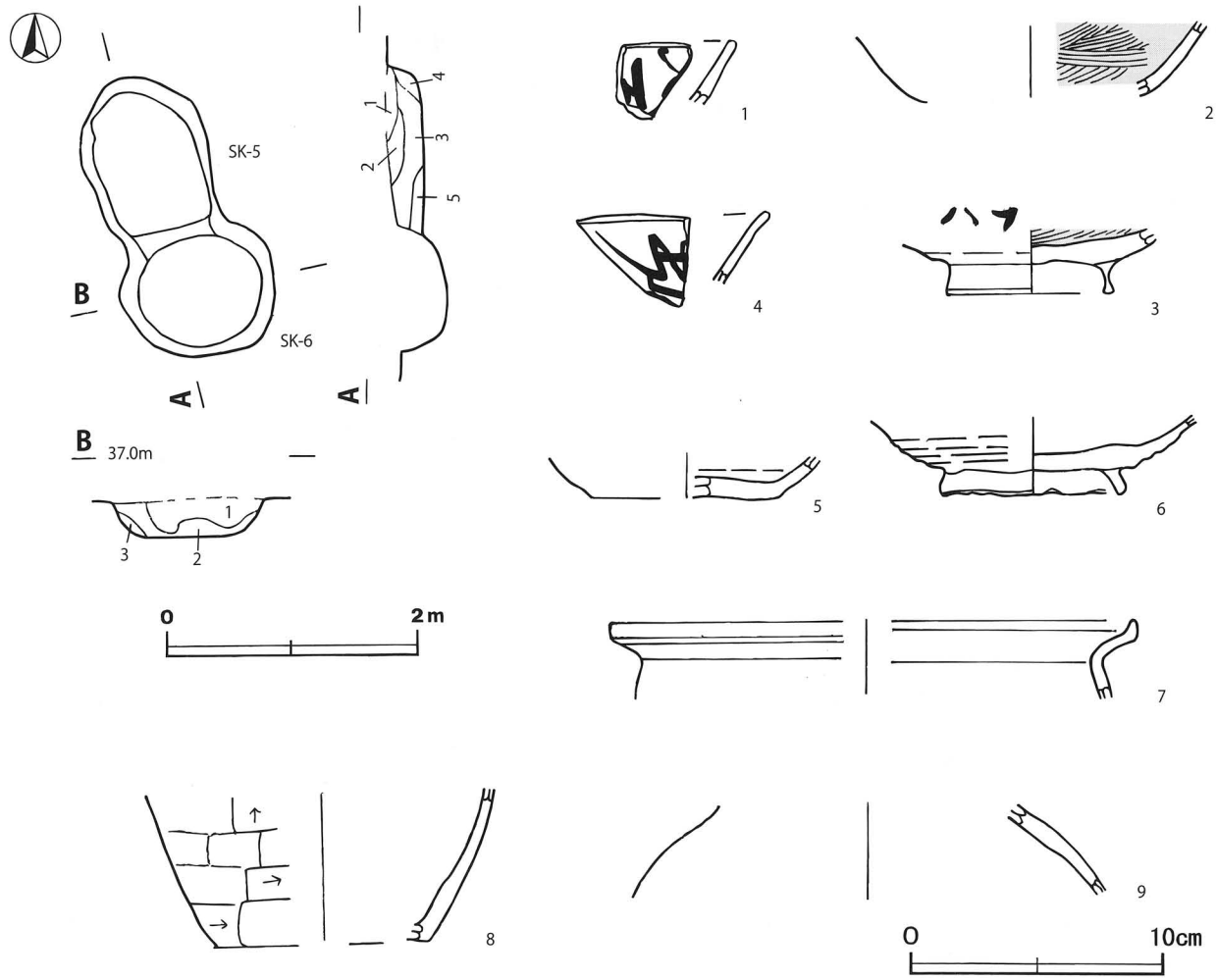
覆土　5層からなる。全体的に暗褐色土で、ロームブロックや炭化粒子、焼土粒子、雲母粒子を含む。不規則な堆積状況から人為堆積と考えられる。

SK-5 土層解説

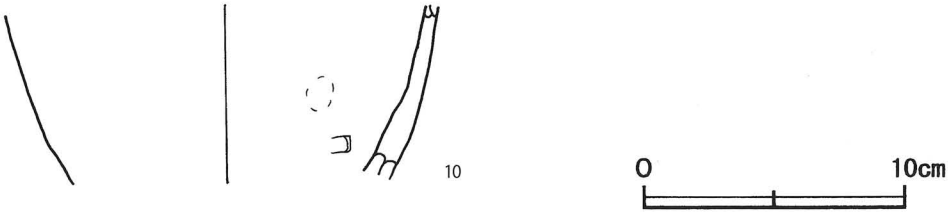
1　暗褐色　ローム粒子・小ブロック少量、炭化粒子中量、焼土小ブロック少量、粘性なし、しまり弱い
2　暗褐色　ローム粒子少量・少ブロック中量、炭化粒子・焼土粒子・雲母粒子少量、粘性なし、しまり弱い
3　暗褐色　ローム粒子中量、炭化粒子・焼土粒子・雲母粒子少量、粘性なし、しまりなし
4　暗褐色　ローム粒子多量、炭化粒子少量、粘性なし、しまりあり
5　暗褐色　ローム粒子多量・大ブロック少量、炭化粒子中量、焼土粒子・小ブロック少量、雲母粒子少量、粘性なし、しまりあり

遺物出土状況　土師器片34点（坏5，甕29）、須恵器片7点（坏5，甕2）、弥生土器片1点が出土している。弥生土器片は人為堆積時の混入によるものと考えられる。なお、墨書土器片を3点確認した。いずれも判読不能である。

所見　時期は、出土土器から9世紀中葉と考えられる。



第21図 第5・6号土坑・出土遺物実測図



第 22 図 第 5 号土坑出土遺物実測図

第10表　第5号土坑出土遺物観察表

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	坏	－	(2.6)	－	長石・石英	にぶい黄橙	普通	内面ヘラ磨き, 内面黒色処理	覆土中	5%, 体部外面墨書「□万」
2	土師器	坏	－	(2.9)	－	長石・石英	にぶい黄橙	普通	内面ヘラ磨き, 内面黒色処理	覆土中	5%
3	土師器	高台付坏	－	(2.6)	6.5	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け, 内面ヘラ磨き, 内面黒色処理	覆土中	30%, 体部外面墨書「□□」
4	須恵器	坏	－	(3.0)	－	長石・石英	灰	良好	体部ロクロナデ	覆土中	5%, 体部外面墨書「□」
5	須恵器	坏	－	(1.8)	〔7.4〕	石英・長石・針状鉱物	灰黄	良好	底部回転ヘラ切り	覆土中	10%
6	須恵器	高台付坏	－	(3.2)	7.2	石英・長石・針状鉱物	黄灰	良好	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け	覆土中	25%
7	土師器	甕	〔21.2〕	(3.2)	－	石英・長石・雲母	橙	普通	口縁部横ナデ	覆土中	5%
8	土師器	甕	－	(6.1)	〔8.4〕	石英・長石・雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	体部外面ヘラ削り	覆土中	5%
9	須恵器	甕	－	(3.8)	－	石英・長石	灰	良好	ロクロナデ	覆土中	5%, 体部に自然釉
10	須恵器	甕	－	(6.8)	－	石英・長石	黒褐	良好	ロクロナデ, 内面に指頭圧痕あり	覆土中	5%

第 6 号土坑（第 21 図）

位置　調査区の中央に位置する。

重複関係　第 5 号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状　長径 1.23m，短径 1.02m の楕円形である。深さは 32cm で壁は外傾して立ち上がっている。底面は皿状である。

覆土　3 層からなる。全体的にロームブロックを含む堆積状況から人為堆積と考えられる。

SK-6 土層解説

1　暗褐色　ローム粒子中量・中ブロック少量・大ブロック微量、粘性なし、しまりあり
2　暗褐色　ローム粒子中量・小ブロック少量、粘性なし、しまり弱い
3　暗褐色　ローム粒子多量、炭化粒子少量、粘性なし、しまり弱い

遺物出土状況　出土しなかった。

所見　時期は不明である。

第 7 号土坑（第 23 図）

位置　調査区の中央に位置する。

規模と形状　径 0.7m の円形である。深さは 15cm で、壁は外傾して立ち上がっている。底面は皿状である。

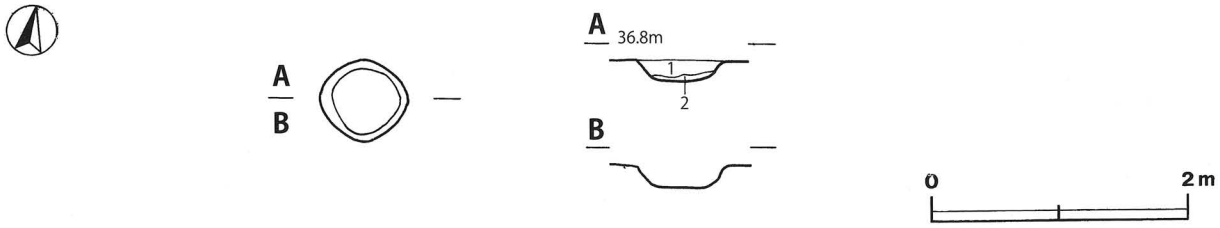
覆土　2 層からなる。ロームブロックを多く含む堆積状況から人為堆積と考えられる。

SK-7 土層解説

1　暗褐色　ローム粒子・小ブロック中量、炭化粒子・焼土粒子少量、粘性なし、しまりあり
2　暗褐色　ローム粒子・小ブロック中量、炭化粒子少量、粘性なし、しまりあり

遺物出土状況　土師器片３点（坏２，甕１）、須恵器片１点（坏）が出土している。いずれも細片であるため、図示できなかった。

所見　時期は、出土土器から奈良・平安時代と考えられる。



第 23 図 第７号土坑実測図

第８号土坑（第 24 図）

位置　調査区の中央に位置する。

規模と形状　長径 1.22m，短径 1.15m の楕円形である。深さは 26cm で、壁は外傾して立ち上がっている。底面は皿状である。

覆土　２層からなる。全体的にロームブロックを多く含む堆積状況から人為堆積と考えられる。

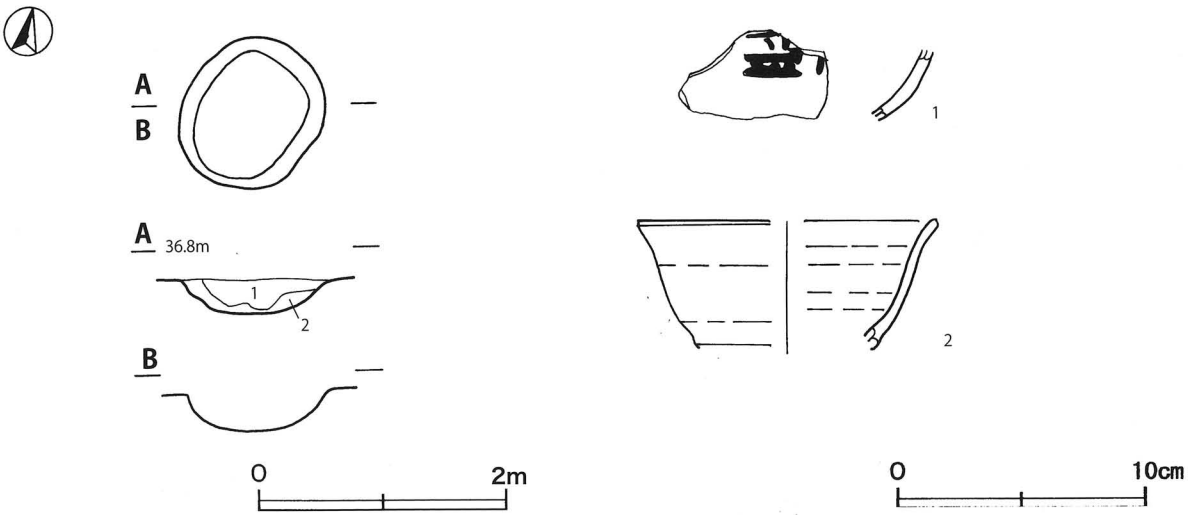
SK-8 土層解説

1　暗褐色　ローム粒子少量、ローム小ブロック中量、炭化粒子・焼土ブロック少量、粘性なし、しまりあり

2　暗褐色　ローム粒子少量、ローム小ブロック中量、粘性なし、しまりあり

遺物出土状況　土師器片６点（坏３，甕３）、須恵器片２点（坏）が出土している。墨書土器片を１点確認したが、判読はできなかった。

所見　時期は、出土土器から９世紀中葉と考えられる。



第 24 図 第８号土坑出土遺物実測図

第11表　第8号土坑出土遺物観察表

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	坏	－	(2.9)	－	石英・長石・針状鉱物	にぶい黄橙	普通	内面黒色処理	覆土中	5%, 体部外面墨書「□」
2	須恵器	坏	〔12.0〕	(5.2)	－	砂粒・石英・長石・雲母・針状鉱物	灰	普通	体部ロクロナデ	覆土中	10%

第９号土坑（第 25 図）

位置　調査区の中央に位置する。

規模と形状　長径 0.9m，短径 0.8m の楕円形である。深さは 24cm で、壁は外傾して立ち上がっている。底面は平坦である。

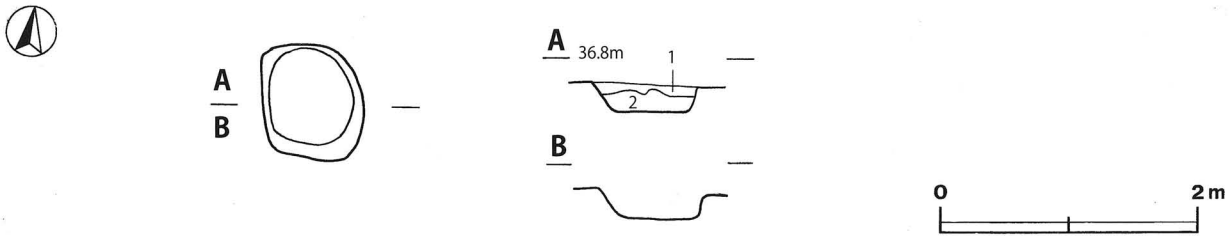
覆土　２層からなる。全体的にロームブロックを多く含む堆積状況から人為堆積と考えられる。

SK-9 土層解説

1　暗褐色　ローム粒子・小ブロック少量、ローム中ブロック微量、粘性なし、しまりなし
2　暗褐色　ローム粒子・小ブロック・中ブロック中量、ローム大ブロック少量、炭化粒子微量、粘性なし、しまりなし

遺物出土状況　土師器片５点（坏１，甕４）、須恵器片２点（甕）が出土している。いずれも細片であり、図示できなかった。

所見　時期は、出土土器から奈良・平安時代と考えられる。



第 25 図 第９号土坑実測図

第１０号土坑（第 26 図）

位置　調査区の中央に位置する。

規模と形状　径 0.9m の円形である。深さは 18cm で、壁は外傾して立ち上がっている。底面は皿状である。

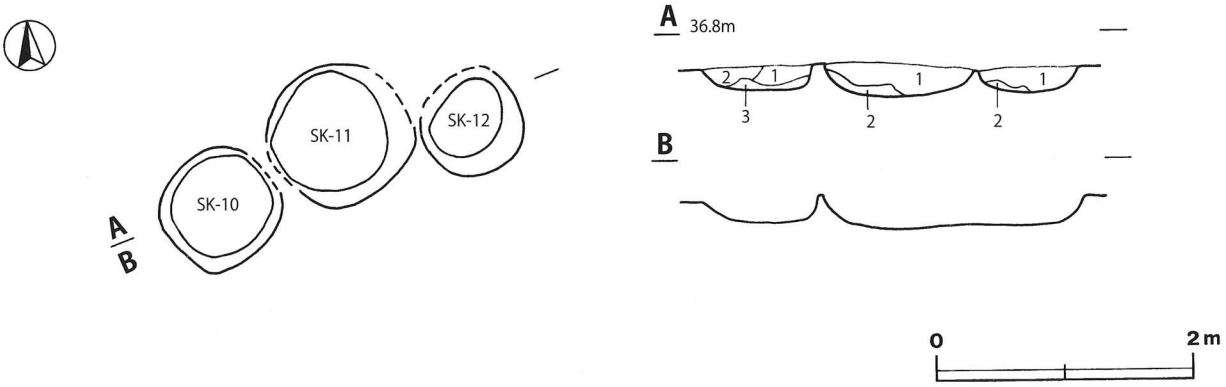
覆土　３層からなる。全体的にロームブロックを含む堆積状況から人為堆積と考えられる。

SK-10 土層解説

1　暗褐色　ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、炭化粒子・焼土粒子微量、粘性なし、しまりなし
2　暗褐色　ローム粒子・小ブロック微量、粘性なし、しまりなし
3　暗褐色　ローム粒子多量、粘性あり、しまりあり

遺物出土状況　出土しなかった。

所見　時期は、不明である。



第 26 図 第 10・11・12 号土坑実測図

第１１号土坑（第 26 図）

位置　調査区の中央に位置する。

規模と形状　径 1.1m の円形である。深さは 27cm で、壁はやや外傾して立ち上がる。底面は皿状である。

覆土　２層からなる。全体的にロームブロックを含む堆積状況から人為堆積と考えられる。

SK-11 土層解説

1　暗褐色　ローム粒子・中ブロック微量、ローム大ブロック少量、粘性なし、しまりなし
2　暗褐色　ローム粒子中量、ローム小ブロック微量、炭化粒子中量、粘性なし、しまりなし

遺物出土状況　出土しなかった。

所見　時期は、不明である。

第１２号土坑（第 26 図）

位置　調査区の中央に位置する。

規模と形状　径 0.8m の円形と考えられる。深さは 17cm で、壁は外傾して立ち上がっている。底面はほぼ平坦である。

覆土　２層からなる。全体的にロームブロックを含む堆積状況から人為堆積と考えられる。

SK-12 土層解説

1　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック中量、炭化粒子少量、粘性なし、しまりなし
2　暗褐色　ローム粒子中量、炭化粒子微量、粘性なし、しまりなし

遺物出土状況　出土しなかった。

所見　時期は、不明である。

第１３号土坑（第 27 図）

位置　調査区の中央に位置する。

規模と形状　長軸 1.9m，短軸 1.45m の不定形である。深さは 27cm で、壁は外傾して立ち上がっている。底面はほぼ平坦である。

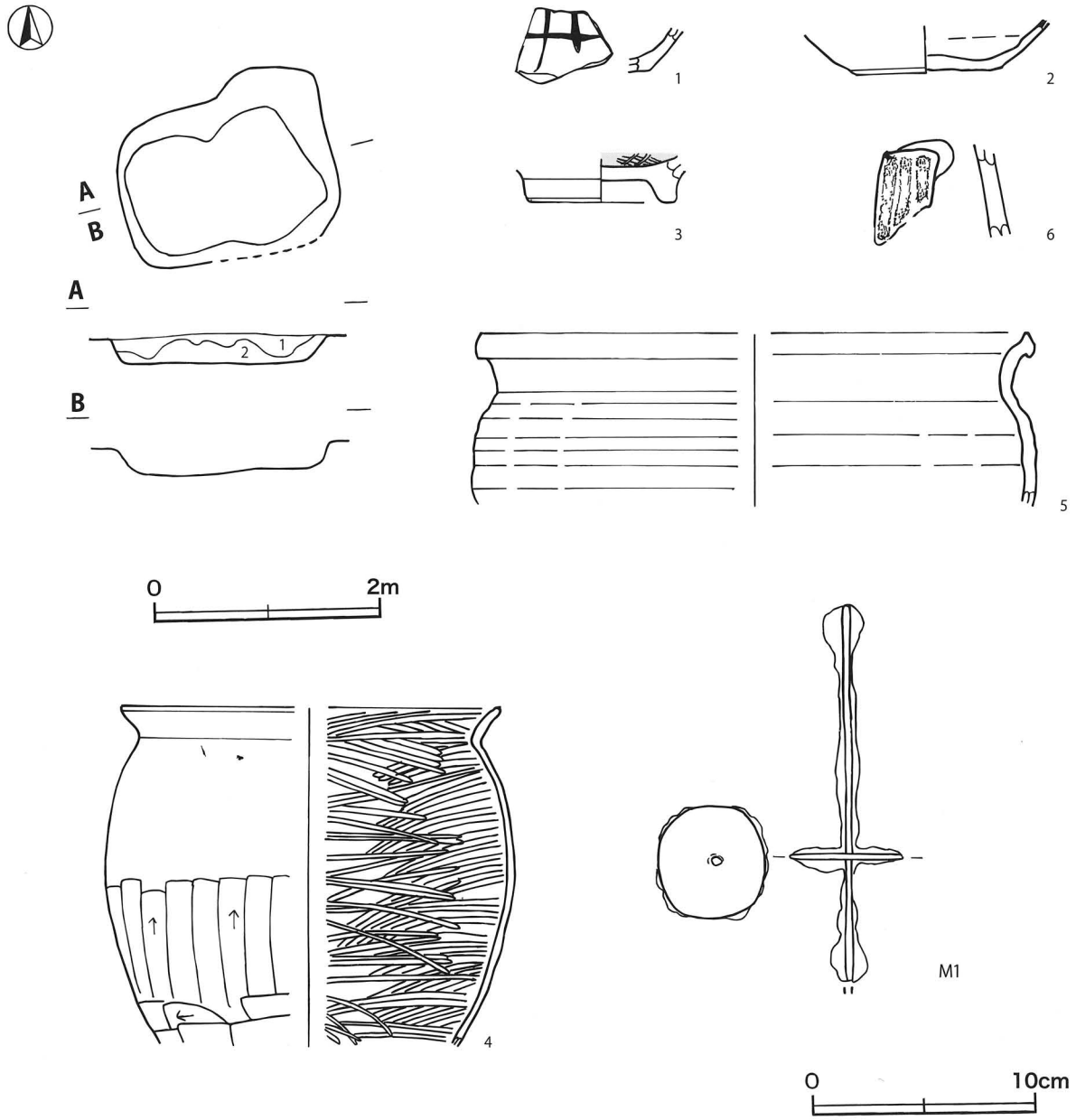
覆土　２層からなる。全体的にロームブロックを含む堆積状況から人為堆積と考えられる。

SK-13 土層解説

1　暗褐色　ローム粒子少量、ローム小ブロック中量、炭化粒子微量、粘性なし、しまりなし
2　暗褐色　ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、炭化粒子少量、粘性なし、しまりあり

遺物出土状況　土師器片 16 点（坏 7，高坏 1，甕 8）、須恵器片 8 点（坏 3，甕 2，甑 1，蓋 1，円面硯 1）、鉄製品 1 点（紡錘車）が出土している。なお、墨書土器片 1 点を確認したが、判読はできなかった。

所見　時期は、出土土器から 9 世紀中葉と考えられる。



第 27 図 第 13 号土坑・出土遺物実測図

第12表　第13号土坑出土遺物観察表

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	坏	—	(2.1)	—	長石・石英	灰黄	普通		覆土中	5%, 体部外面墨書「□」
2	須恵器	坏	—	(2.2)	〔6.6〕	長石・石英・針状鉱物	にぶい褐	良好	底部回転ヘラ切り	覆土中	20%
3	土師器	高台付坏	—	(2.1)	6.4	砂粒・長石	灰	普通	体部内面ヘラ磨き, 内面黒色処理	覆土中	70%
4	土師器	甕	〔22.0〕	(20.0)	—	石英・長石	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り, 内面ヘラ磨き	覆土中	30%
5	土師器	甕	〔32.0〕	(10.4)	—	石英・長石	にぶい赤褐	不良	体部外面ロクロナデ	覆土中	10%
6	須恵器	円面硯	—	(4.3)	—	石英・長石	灰	良好	脚部横ナデ, 間に2条の刻み	覆土中	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質・胎土	特徴	出土位置	備考
1	紡錘車	17.0	5.0	—	40	鉄		覆土中	M 1

（３）柱穴跡

本調査区では、４基の柱穴跡が確認された。各柱穴間に配列の規則性がなく、建物跡を想定できなかったため、性格不明の柱穴跡として記述した。

第１号柱穴跡（第 28 図）

位置　調査区の中央に位置する。

規模と形状　径 0.6m の円形で、深さは 43cm である。

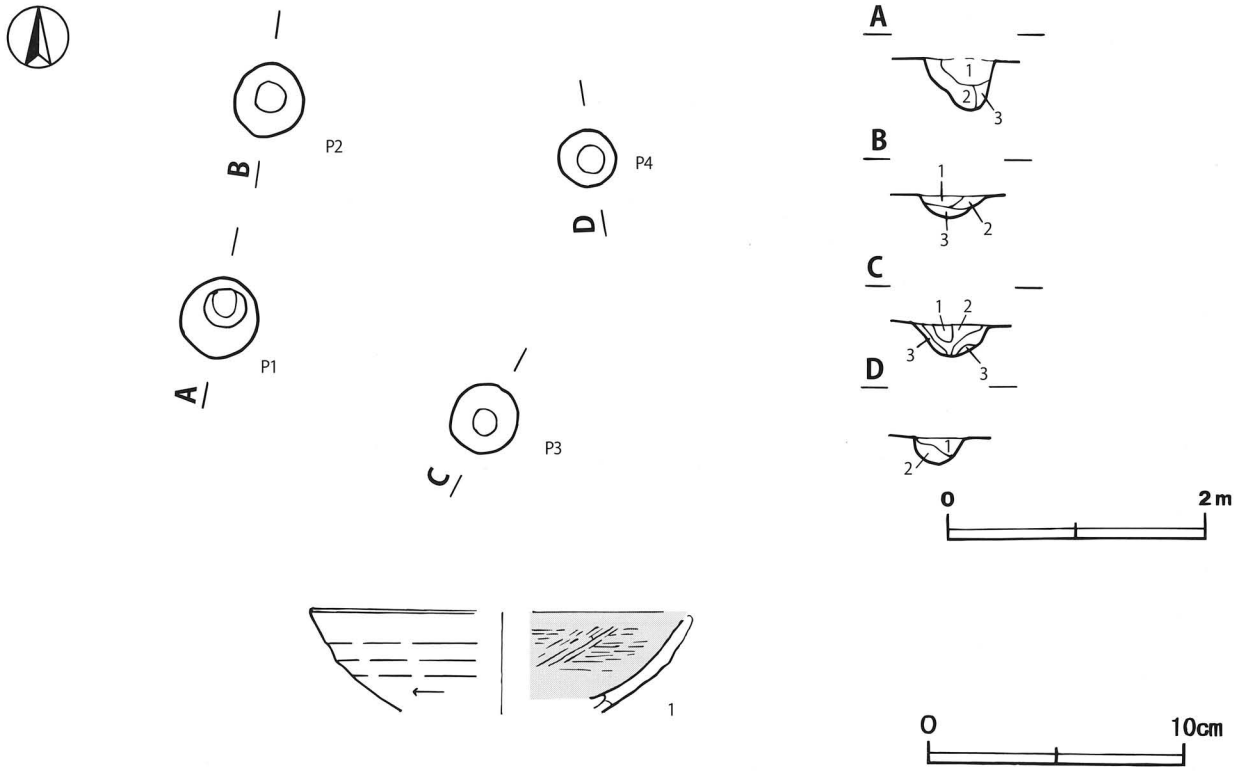
覆土　３層からなる。全体的に暗褐色土で、焼土ブロックや雲母粒子を含む堆積状況から人為堆積と考えられる。

Pit-1 土層解説

1　暗褐色　ローム粒子・焼土小ブロック少量、炭化粒子・焼土粒子・雲母粒子中量、粘性なし、しまりあり
2　暗褐色　ローム粒子・炭化粒子・焼土小ブロック・雲母粒子少量、焼土粒子中量、粘性あり、しまりあり
3　暗褐色　ローム粒子中量、炭化粒子・雲母粒子小量、焼土粒子微量、粘性あり、しまりあり

遺物出土状況　土師器片 24 点（坏 2，甕 22）、須恵器片２点（坏，甕）が出土している。

所見　時期は、出土土器から平安時代と考えられる。



第 28 図 第１～４号柱穴跡出土遺物実測図

第13表　第1号柱穴跡出土遺物観察表

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	坏	〔14.8〕	(4.0)	－	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	底部回転ヘラ削り，内面ヘラ磨き，内面黒色処理	覆土中	5%

第 2 号柱穴跡（第 28 図）

位置　調査区の中央に位置する。

規模と形状　径 0.5m の円形で、深さは 16cm である。

覆土　3 層からなる。全体的に、ロームブロックや焼土ブロック、雲母粒子を含む堆積状況から人為堆積と考えられる。

Pit-2 土層解説

1　暗褐色　ローム粒子・焼土小ブロック少量、炭化粒子・焼土粒子・雲母粒子中量、粘性なし、しまりあり
2　暗褐色　ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子・焼土小ブロック・雲母粒子少量、粘性なし、しまり弱い
3　暗褐色　ローム粒子・小ブロック・雲母粒子少量、炭化粒子中量、粘性なし、しまり弱い

遺物出土状況　土師器片 6 点（甕）、須恵器片 1 点（坏）が出土している。いずれも細片であり図示できるものはなかった。

所見　時期は、出土土器から平安時代と考えられる。

第 3 号柱穴跡（第 28 図）

位置　調査区の中央に位置する。

規模と形状　径 0.5m の円形で、深さは 22cm である。

覆土　3 層からなる。全体的にローム粒子を多く含むことから人為堆積と考えられる。

Pit-3 土層解説

1　暗褐色　ローム粒子多量、炭化粒子微量、粘性あり、しまり強い
2　褐　色　ローム粒子多量、粘性あり、しまりあり
3　暗褐色　ローム粒子中量、炭化粒子微量、粘性なし、しまりなし

遺物出土状況　出土しなかった。

所見　時期不明である。

第 4 号柱穴跡（第 28 図）

位置　調査区の中央に位置する。

重複関係　第 3 号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状　径 0.45m の円形で、深さは 18cm である。

覆土　2 層からなる。ロームブロックや雲母粒子、炭化粒子を含む堆積状況から人為堆積と考えられる。

Pit-4 土層解説

1　暗褐色　ローム粒子中量、炭化粒子微量、雲母粒子少量、粘性なし、しまり強い
2　暗褐色　ローム粒子・小ブロック中量、粘性あり、しまりあり

遺物出土状況　土師器片 1 点（坏）が出土している。細片であり、図示できなかった。人為堆積時の混入とも考えられる。

所見　時期は、第 3 号住居跡を掘り込んでいることから平安時代以降と考えられる。

第３章　総　　括

今回の小原遺跡の発掘調査は、畑作地帯総合事業（北区）地内を横断する市道（友）１級５号線改良工事の600㎡の調査であった。

調査は、10月初め台風16，17号襲来の後であったため、調査区東側は地下水が湧き出す状況であった。これは下方の水田を埋めて畑地にしたためであると思われる。調査期間中は晴天に恵まれたとはいえ、調査は難行した。しかし、遺構は道路敷地内にほぼ収まっていたことから、それぞれの遺構を欠けることなく観察記録することができたことは幸運であった。

検出された遺構は、竪穴住居跡７軒、土坑13基、柱穴跡４基である。時代別にみると、古墳時代４軒、奈良・平安時代３軒で、古代の遺構と思われる土坑、柱穴跡である。

古墳時代の竪穴住居跡のうち第１号と第７号住居跡からは、ほぼ完形や復元できた土師器が数多く出土し、この土器等から住居跡は６世紀末から７世紀初頭の古墳時代後期と思われる。規模では、第５号住居跡が約７ｍの方形で一番大型で、次いで第７号住居跡は、ほぼ５ｍほどと推定される。これは住居跡東側が削平されていて、床面が露呈している上に湧き水があっての推測である。その他の住居跡は４ｍの方形である。

奈良・平安時代の住居跡は、３ｍ前後の隅丸方形で、出土遺物が多かった第６号住居跡が重要な史料を提供してくれた。第６号住居跡は、古墳時代の大型住居跡第５号の北東部で重複して検出され、出土遺物では、土師器片129点の中に墨書土器３点、須恵器片26点の中に円面硯片が１点あり、さらに石製の装具である石帯の蛇尾（だび）が１点出土したことである。これは考古学上「銙帯（かたい）」とよばれる腰帯の付属金具（帯金具）である。古代の記録によると、８世紀の日本では、唐様式の帯金具を官人の身分を表示するために採用したものであるという。そして、延暦15年（796）銅の不足を補うため、青銅製の帯金具を禁じた。そのため、この頃から石製の装具としての石帯が登場したという。

蛇尾は帯の先端、いわゆる「バックル」にあたる鉸具（かこ）に差し込む帯の最先端で、舌状形のものが一般的である。この石製帯金具と円面硯、さらに墨書土器の出土から、この周辺に官人が住居していたことを示唆するものであろう。ここで畑地帯総合事業南区・北区の発掘調査と事業に先立って遺跡確認の調査結果等から、この周辺の古代の一端を垣間見ることができる。

南区の筒塙地内の三本松遺跡は、平成14年度に3,600㎡が調査された。報告書によると、奈良・平安時代の住居跡は、64軒が検出され、ここが旧茨城国の中心的地域で、広範囲な集落群が展開されていたと述べられている。

更にＪＲ常磐線敷地北側の小原地内で、畑地帯総合事業（北区）が計画されたことから、平成16年６月にＪＲ線路下り線に沿って山王塚古墳東側の緩丘状の畑地を試掘による確

認調査を実施した。ここからは弥生土器や土師器が出土し、住居跡や土坑等の落込みがかなり多く確認され、この一帯に弥生時代から古代の遺跡が所在することが明らかになった。これは三本松遺跡がここまで広がっていたと考えられるが、明治20年代の鉄道建設によって集落は分断されたものと思われる。

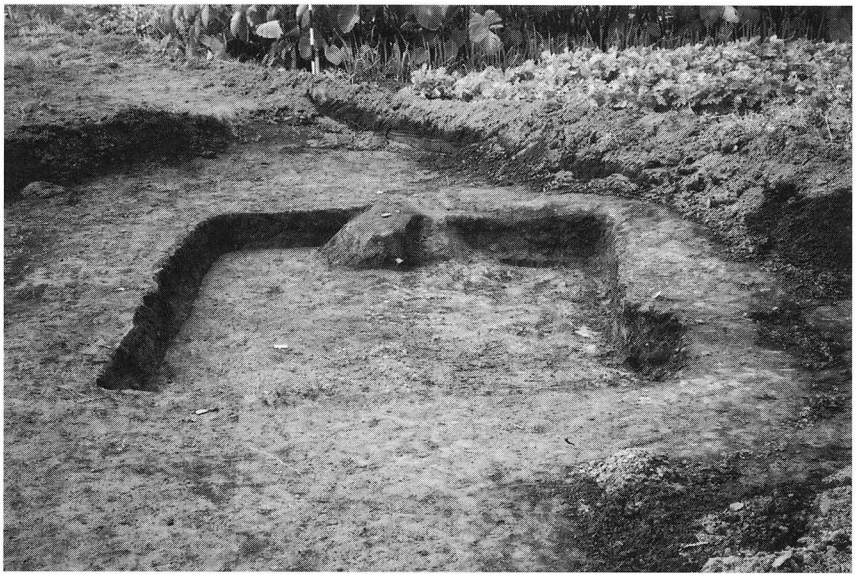
更に小原地内の北区では、幹線道2号、1号の建設地が平成15, 16年度に発掘調査された。平成15年度の調査区は、山王塚古墳の西側250 mの地点で限られた調査面積から縄文時代から古墳時代前期の遺構が検出され、古墳時代後期と奈良・平安時代の遺構は検出されなかった。平成16年度の調査地は、15年度調査地から北東400 mほどの地点で、弥生時代と古墳時代後期、さらに8世紀前葉の住居跡1軒と3棟の掘立柱建物跡が検出された。この2か所の調査から、双方の台地の集落跡に時代差が認められた。今回の調査地は、この平成16年度調査区南端から40 mと近隣し、北東へ直行する計画道路地内である。同じ東側に突き出た地形の台地上にあって、この地形はさらにＪＲ線路沿いの緩丘地から南の三本松遺跡へ広がると推測される。前述したように三本松遺跡が旧茨城国の中心的地域だとすれば、北端台地のこの地にも官人が居住していたことも考えられよう。

更に平成16年度の調査結果と今回の調査を比較検証すると、ここには弥生時代の遺構はないが、古代の遺構と思われる柱穴跡4基も確認された。しかし、各柱穴間の配列に規則性がないことから、建物跡とは判定できなかった。

今回の調査区は、市道がここでU字形に曲がっているため、直線状に新設する改良工事で、その範囲が調査対象であった。この市道は古墳群を結ぶ古道であるとの伝承があることを勘案すると、この場所だけが曲がって南側が突出しているのは、この周辺に豪農もしくは村長(むらおさ)か、または官人の居館跡があったことを出土遺物と併せて推測することもできる。
友部町史では、「倭名抄」や「常陸風土記」等と一本松古墳群のあるこの地を古代政治の中心をなしていても不思議はないと述べている。今後の調査によって更なる究明が期待される。

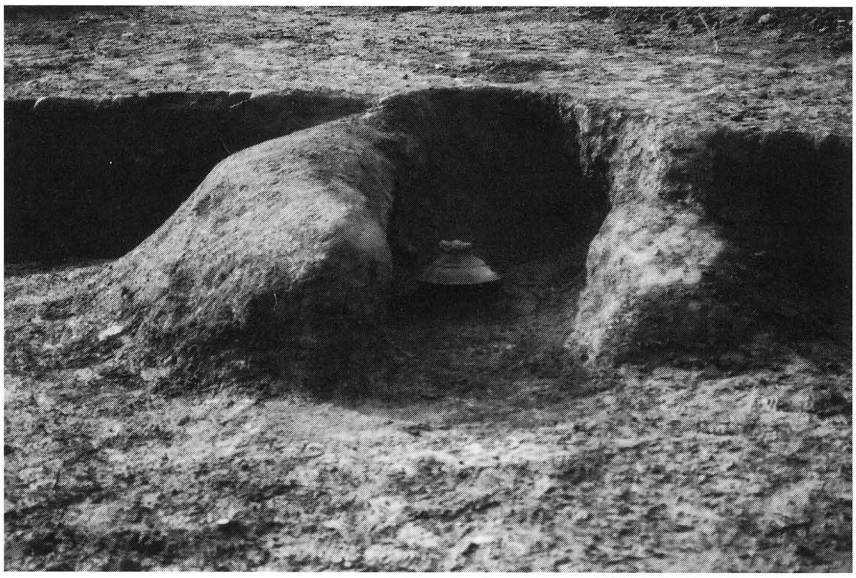
写　真　図　版

小　原　遺　跡



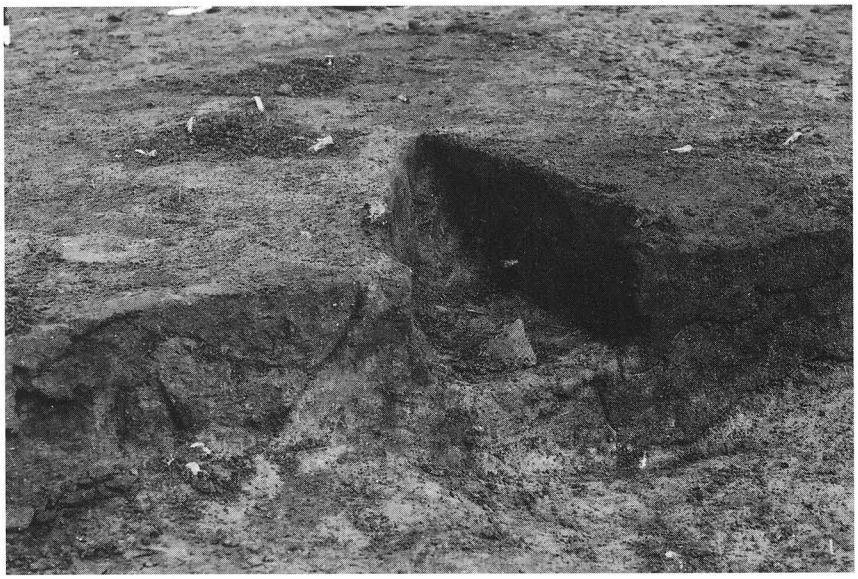
第１号住居跡
完　掘　状　況

第１号住居跡
遺物出土状況



第１号住居跡
竈完掘状況

第２号住居跡
完　掘　状　況



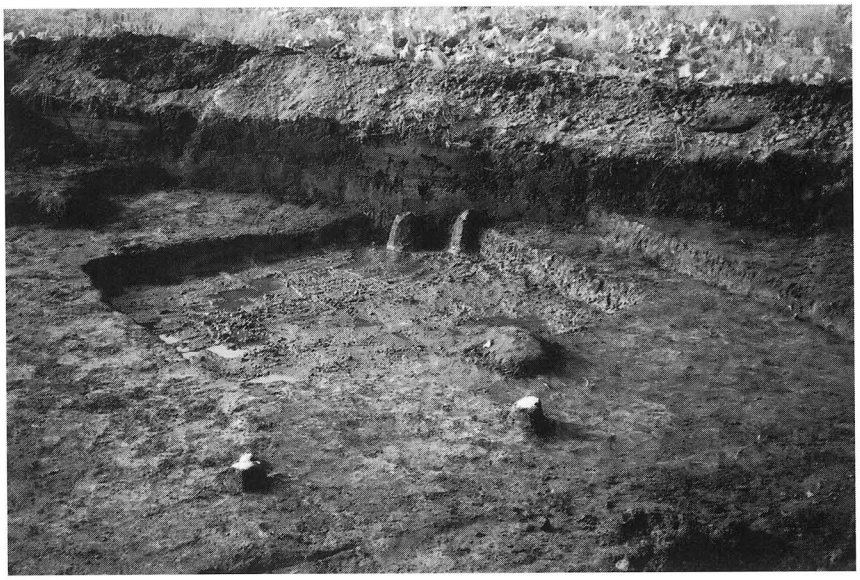
第２号住居跡
竈土層断面

第３号住居跡
完　掘　状　況

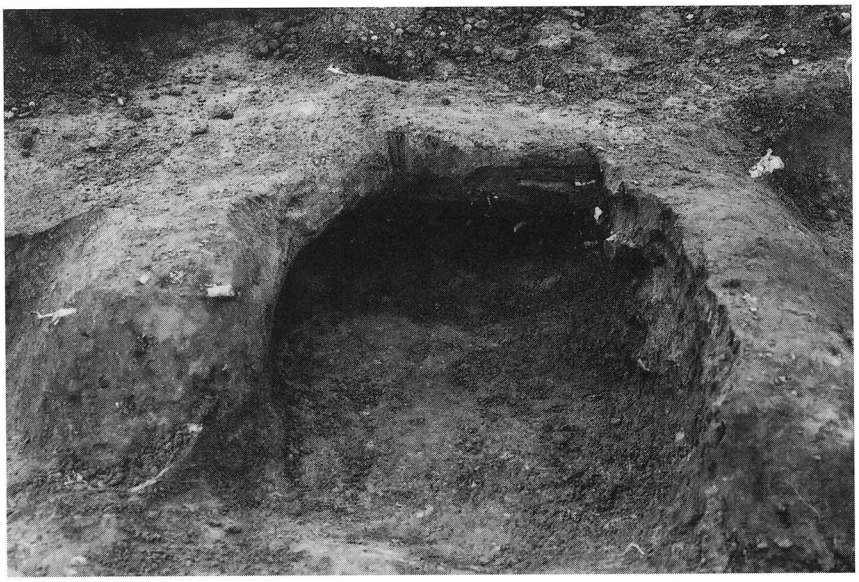
第４号住居跡
完　掘　状　況

第４号住居跡
遺物出土状況

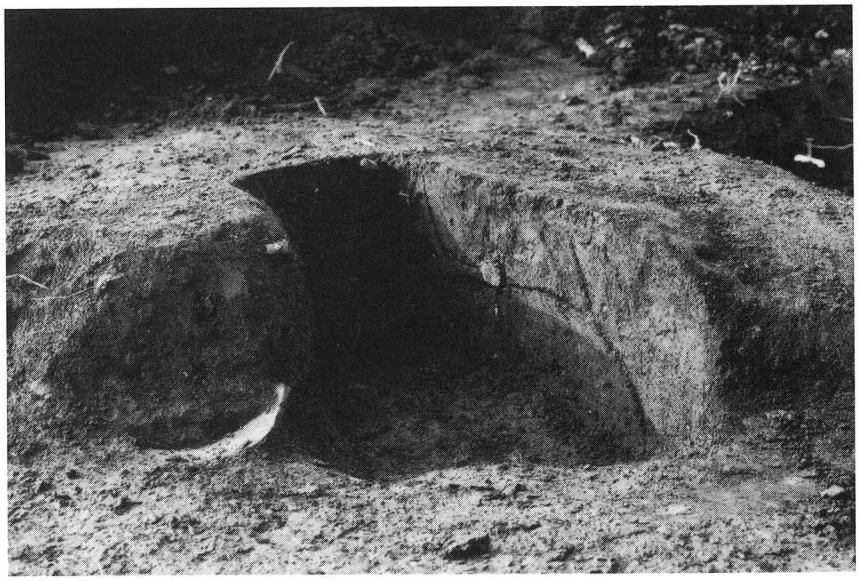
第５号住居跡
完　掘　状　況



第5・6号住居跡
遺物出土状況

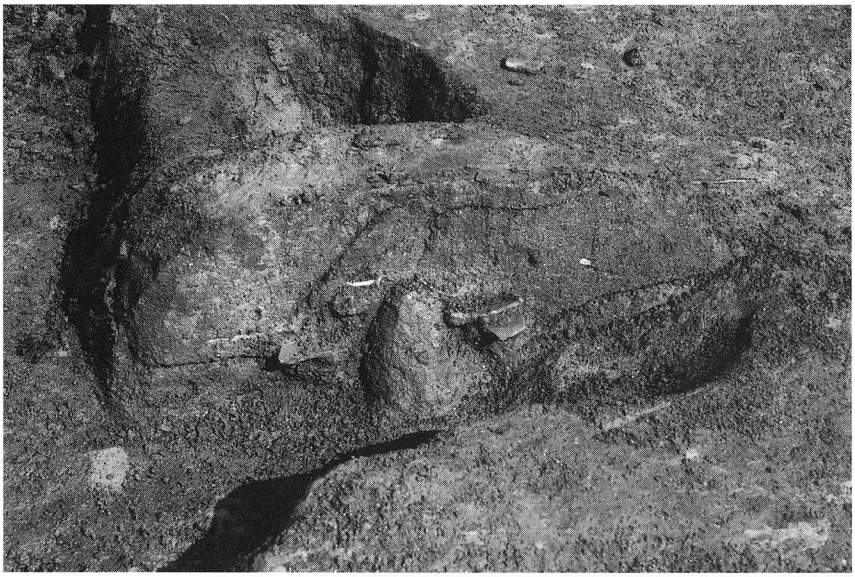


第5号住居跡
竈完掘状況



第5号住居跡
竈遺物出土状況

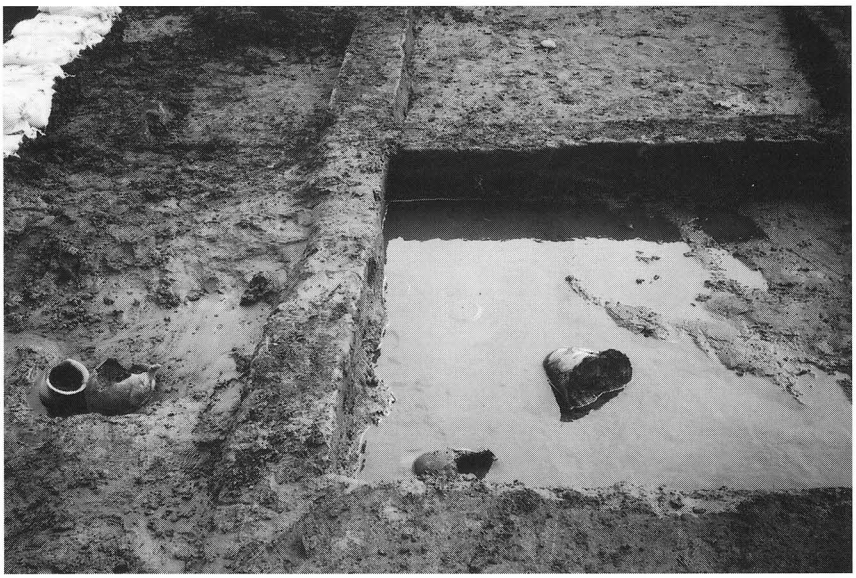
第６号住居跡
完　掘　状　況



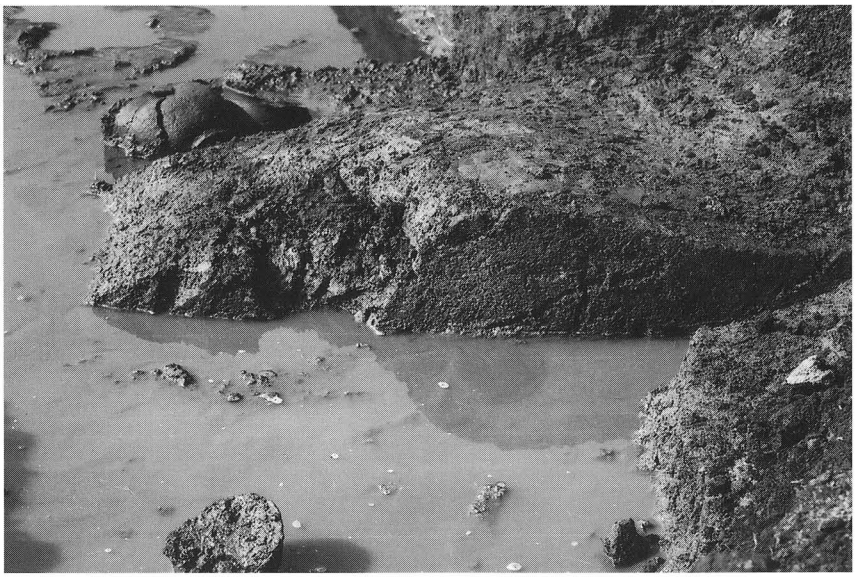
第６号住居跡
竈遺物出土状況

第６号住居跡
竈完掘状況

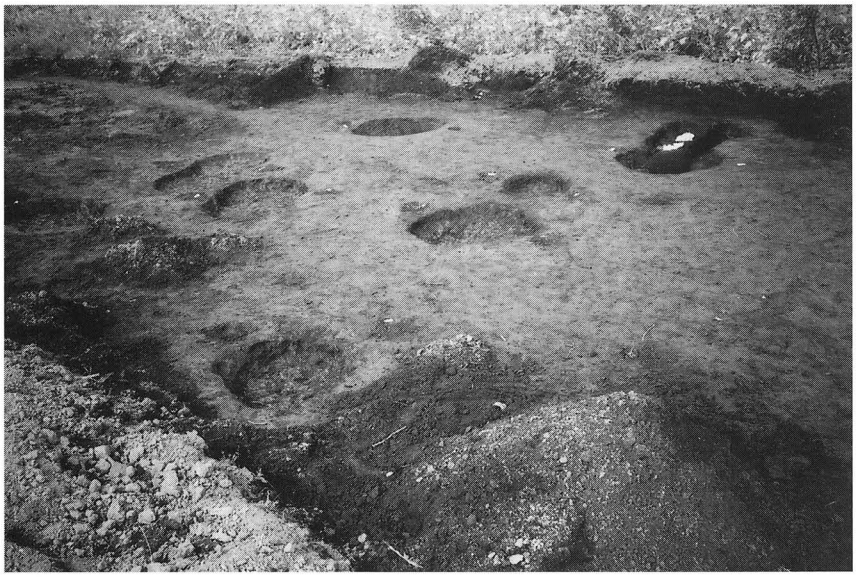
第７号住居跡
炭化材出土状況



第７号住居跡
遺物出土状況

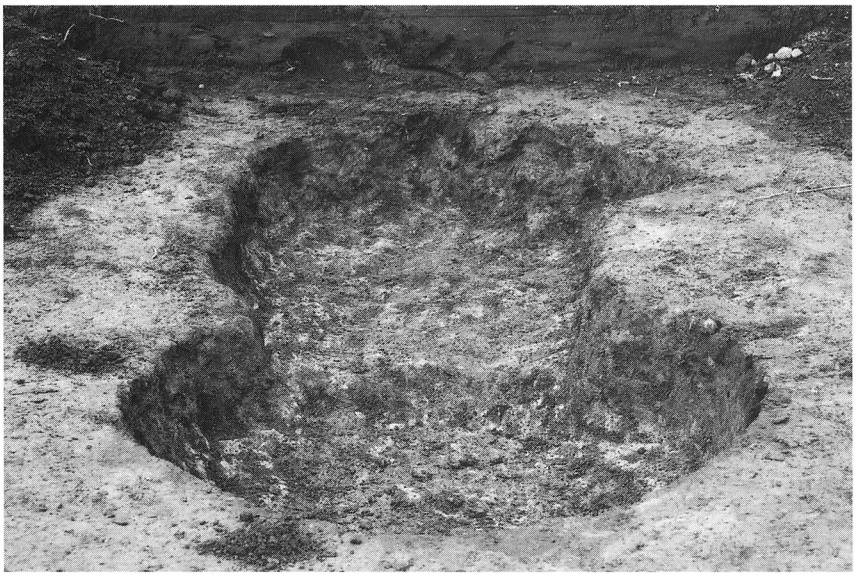


第７号住居跡
竈土層断面



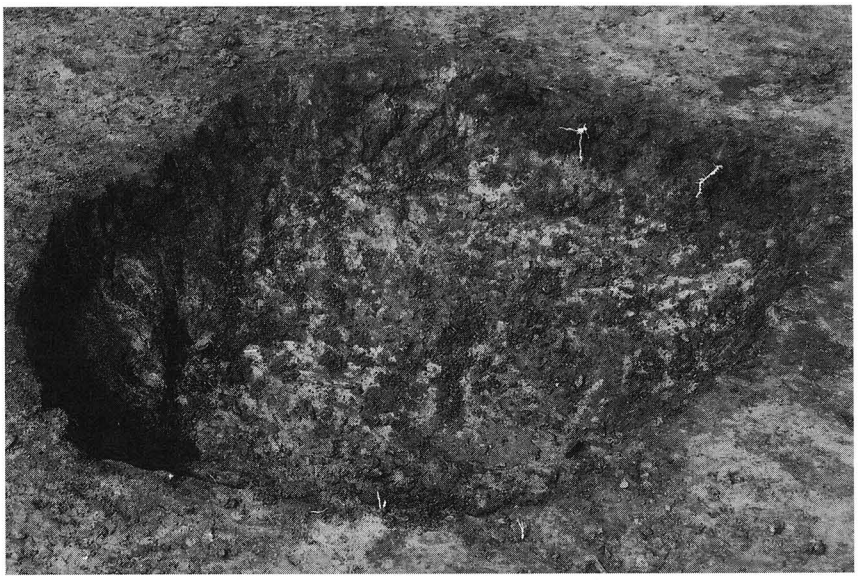
土　坑　群
完　掘　状　況

第 4 号土坑
完　掘　状　況



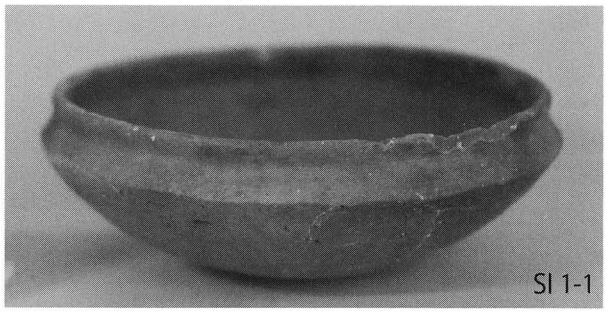
第 5・6 号土坑
完　掘　状　況

第 7 号土坑
完 掘 状 況

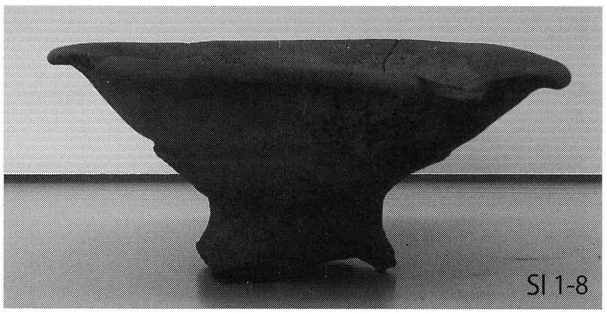


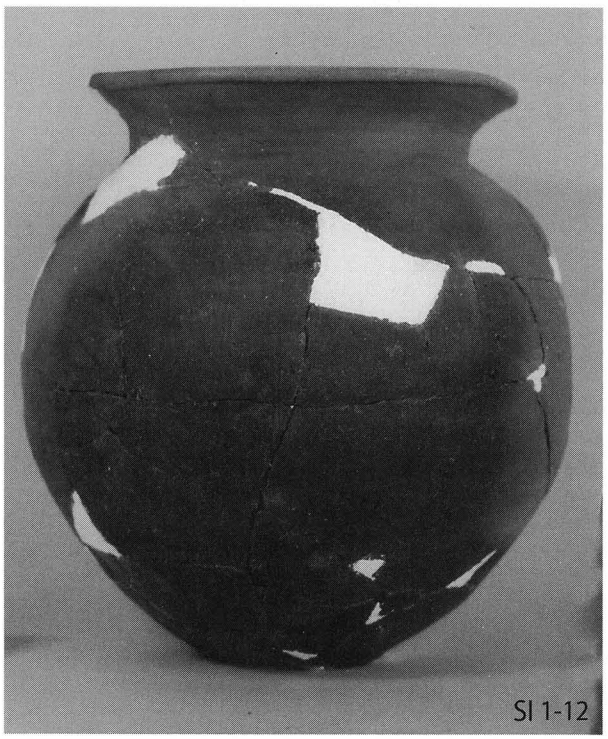
第 8 号土坑
完 掘 状 況

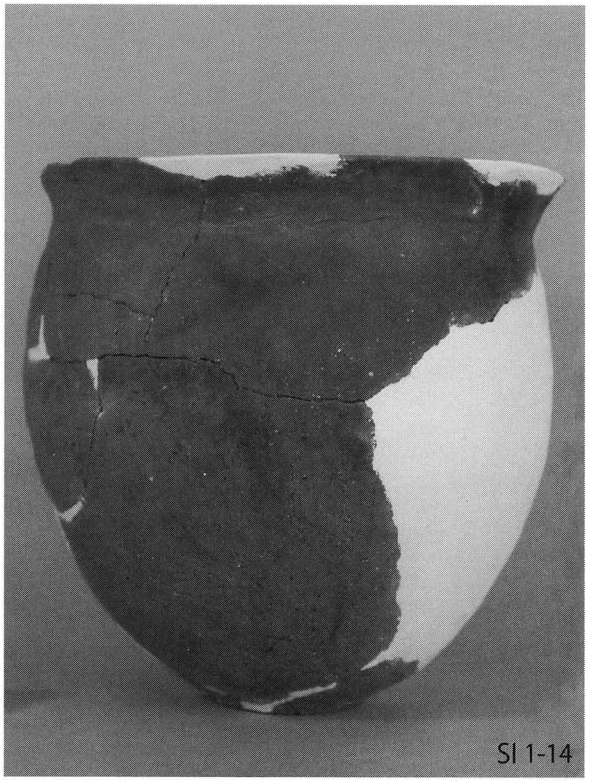
第 10 号土坑
完 掘 状 況

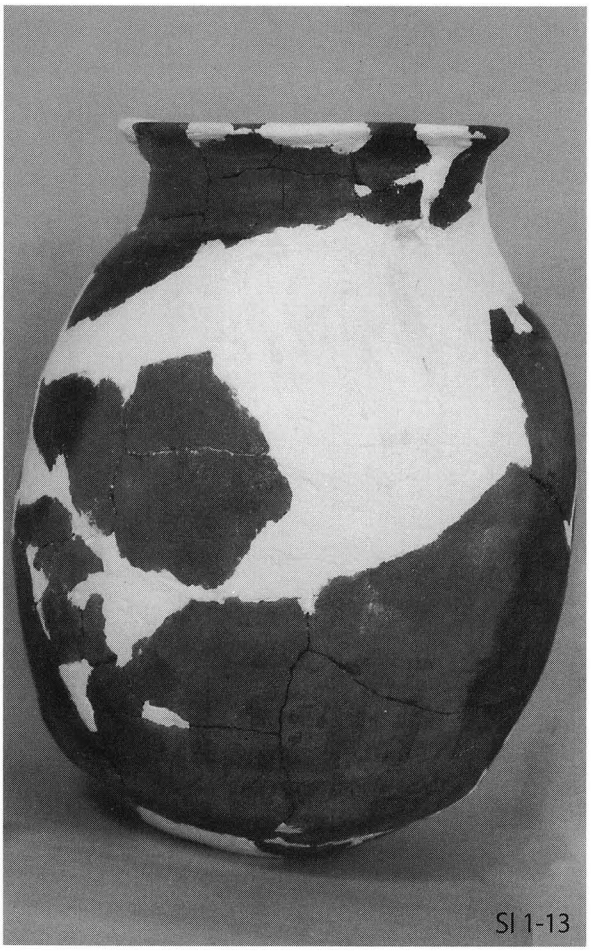

SI 1-1

SI 1-2


SI 1-8


SI 1-12


SI 1-14


SI 1-13

PL 10

SI 3-Q1

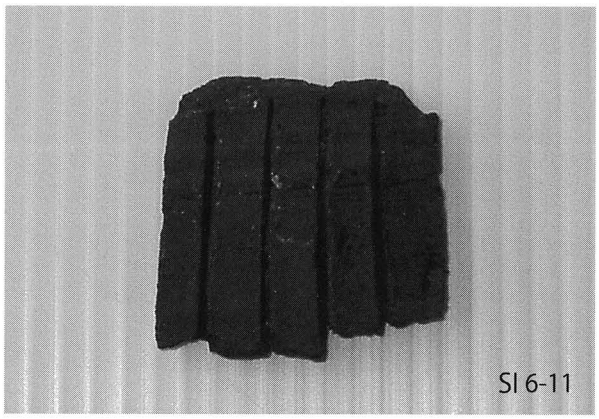
SI 5-1

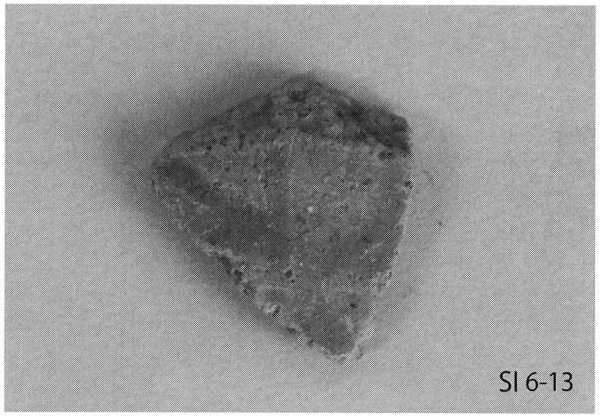
SI 5-2

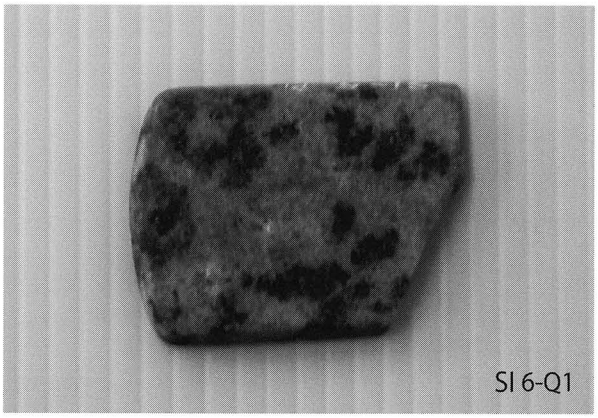
SI 6-12

SI 4-6

SI 5-9


SI 6-11


SI 6-13

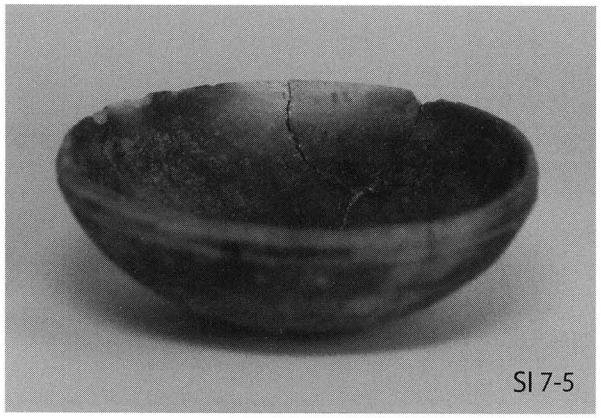

SI 6-Q1

SI 7-1

SI 7-2

SI 7-3

SI 7-4


SI 7-5

PL 12

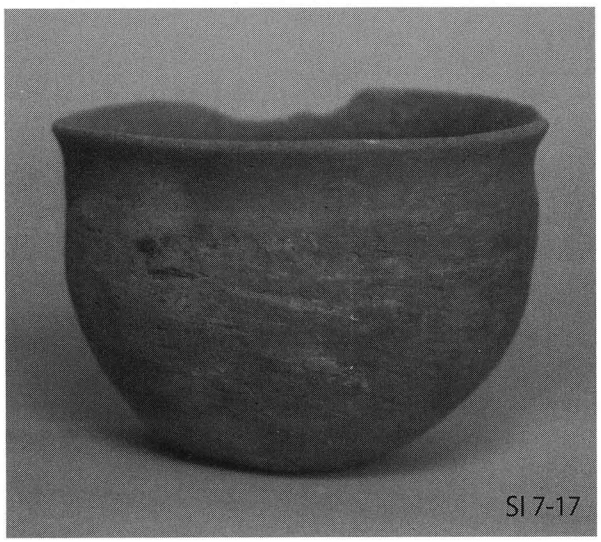
SI 7-6

SI 7-7

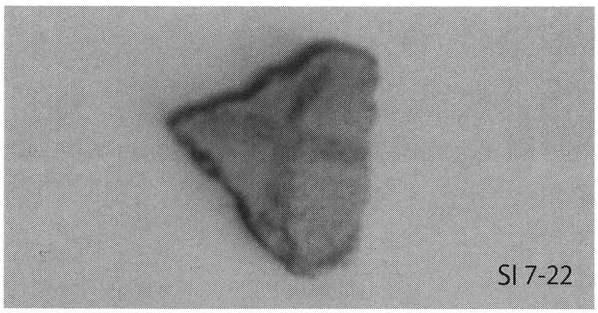
SI 7-8

SI 7-9

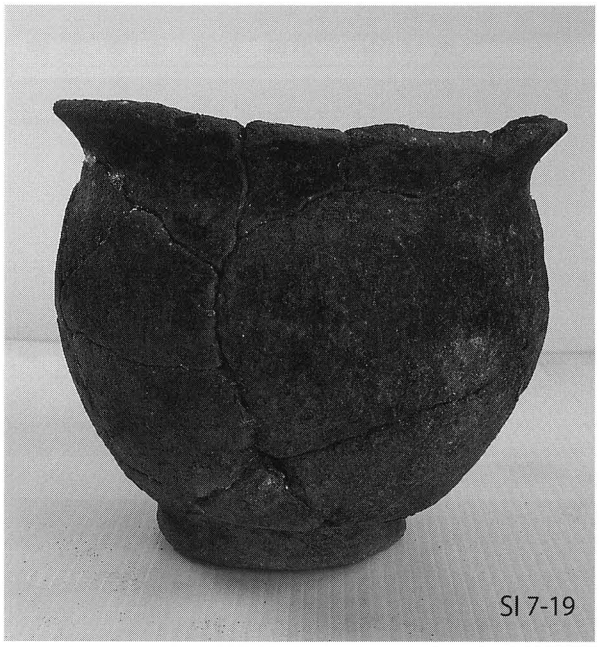
SI 7-16

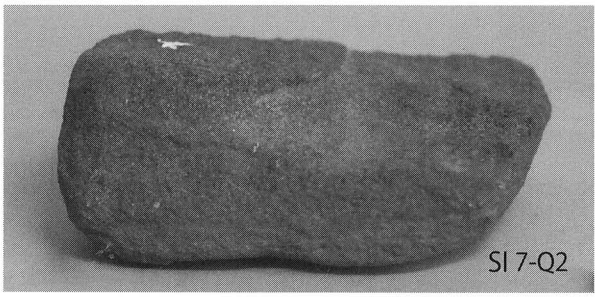

SI 7-17

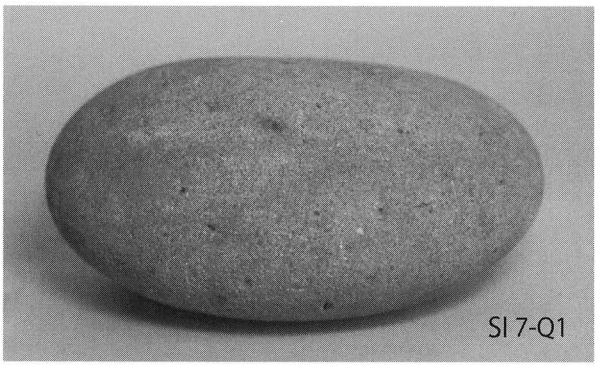
SI 7-18

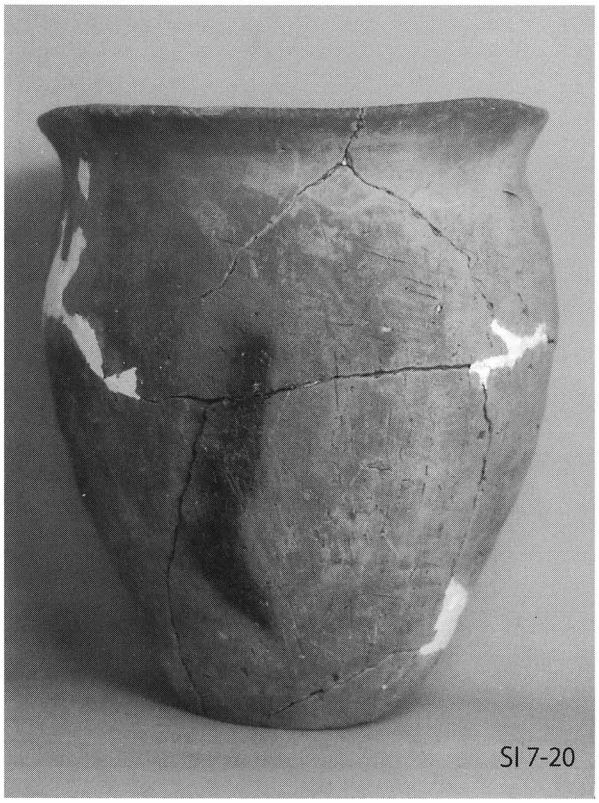

SI 7-22

SI 7-Q3


SI 7-19


SI 7-Q2


SI 7-Q1

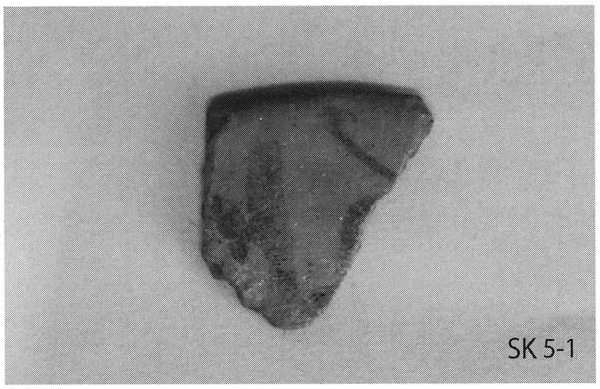

SI 7-20

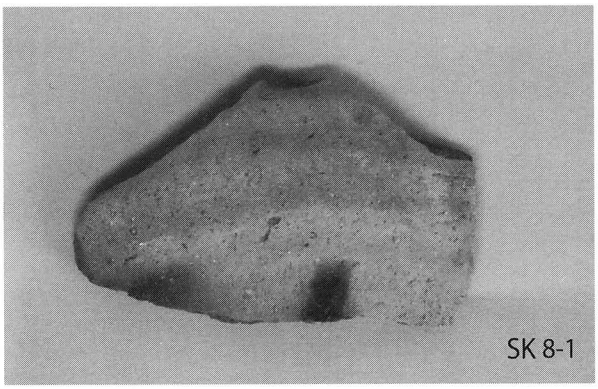
SI 7-21

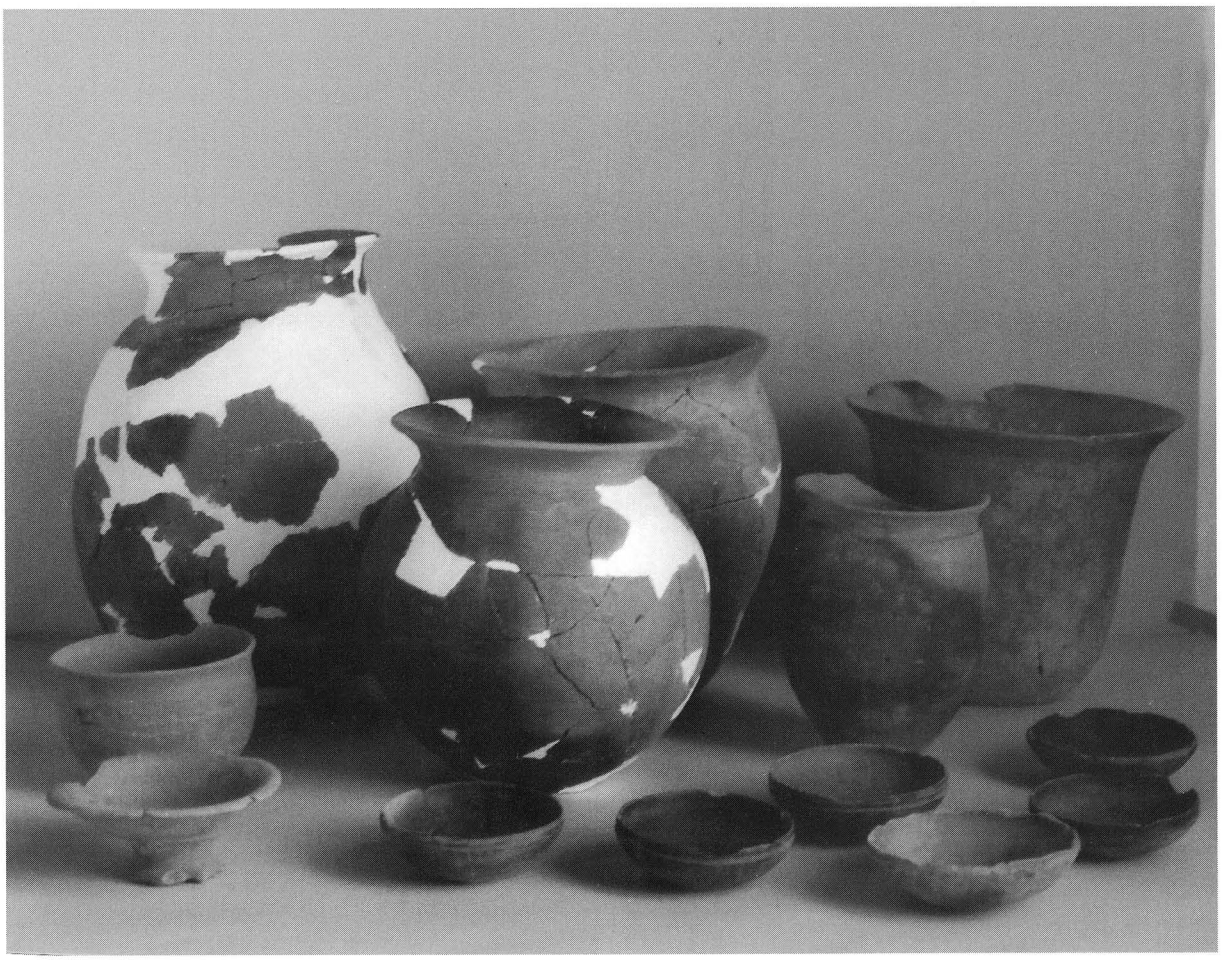
PL 14

SK 4-1

SK 4-2


SK 5-1


SK 8-1



報告書抄録

ふりがな	おばらいせき
書名	小原遺跡
副書名	小原遺跡発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	能島　清光　　山口　憲一
編集機関	笠間市小原遺跡発掘調査会
所在地	〒309-1698　茨城県笠間市石井717番地
発行機関	笠間市小原遺跡発掘調査会
発行年月日	2007（平成19）年1月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 （m²）	調査原因
おばらいせき 小原遺跡	いばらきけんかさましおおあざおばらばんほか 茨城県笠間市 大字小原780-1番 外	8321	21	36度 21分 42秒	140度 19分 45秒	2006年 10月8日 ～ 2006年 12月25日	600m²	市道（1級5号線）改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	検出遺構		主な遺物	特記事項
小原遺跡	集落	古墳	住居跡	4軒	土師器、須恵器 灰釉陶器 石製品 鉄製品 土製品	古墳時代から奈良・平安時代の7軒の住居跡が検出され、完形の土師器や墨書土器片、石製帯金具、円面硯等の貴重な遺物が多く出土している。
		奈良・平安	住居跡	3軒		
			土坑	13基		
			住穴跡	4基		

小　原　遺　跡

平成19年1月31日

発行　笠間市小原遺跡発掘調査会
笠間市石井717番地
TEL　0296-72-1119

印刷　山口写真製版印刷
常陸太田市木崎二町1746-4
TEL　0294-72-5311